

T  
S

# 調教施設

調教エロバニースーツで

## 変態女に

されちゃいました



聖華快樂書店

挿絵 9枚  
文字数 55,000字



淫乱

エロ

バニ  
編

エルトリア  
夜空さくら

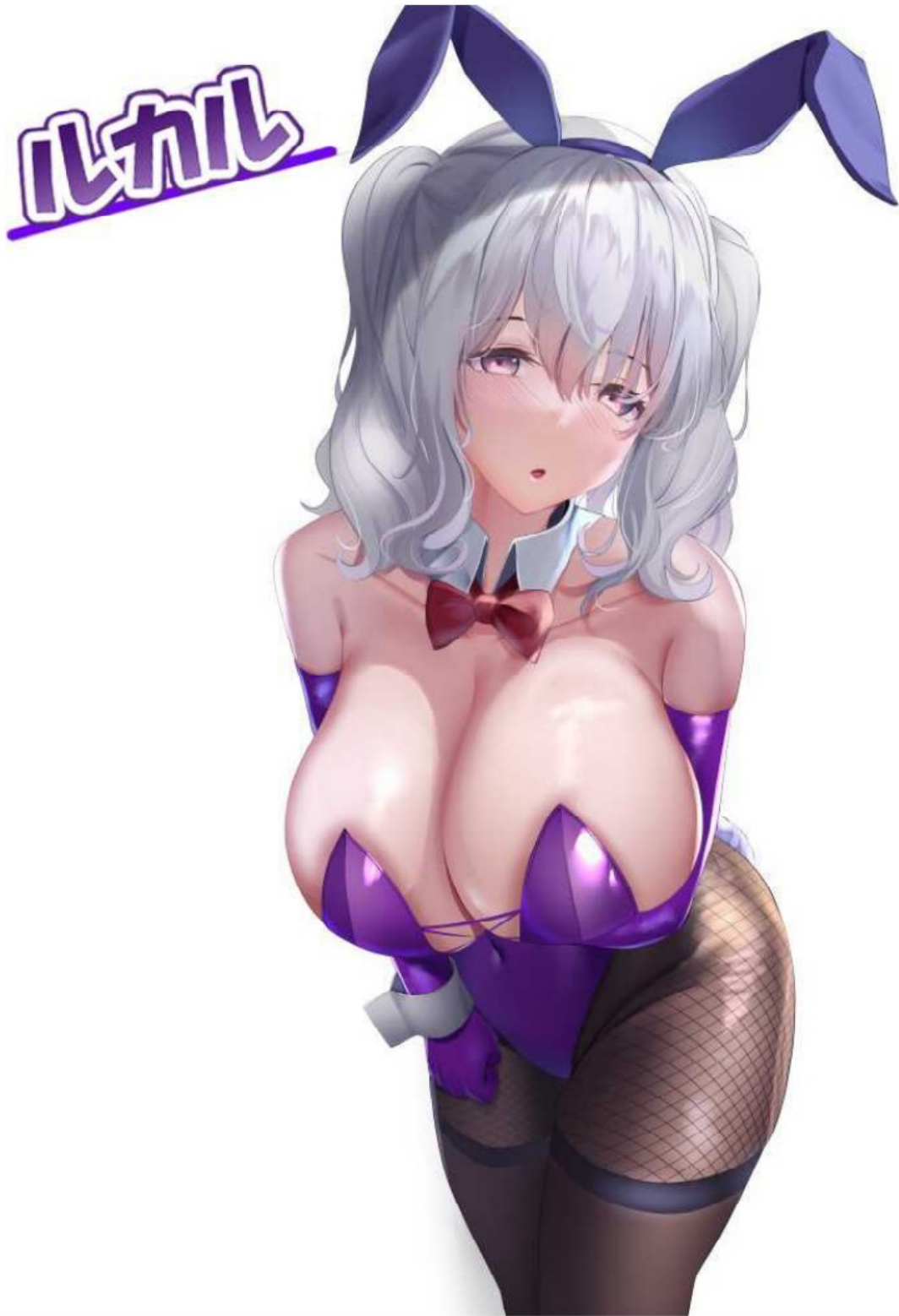
ILLUSTRATOR  
夕月ひじり

女体  
代

調  
教  
施  
設



聖華文庫





## 第一話 囚われの司令官

その台に、一人の男性が拘束されていた。

年齢は三十代過ぎくらいだろうか。非常に逞しい体つきをしているのが誰の目にもよくわかった。

なぜなら両手両足の手首足首を台に固定された彼は、生まれたままの姿だったからだ。その鍛え抜かれた胸板や腹筋を惜しげもなく晒し、隠すべき股間も丸出しにさせられていた。

そんな格好で拘束されている彼は、目の前にやって来た怪しげな風貌の男を睨みやる。

「アウライ帝国の者は、捕虜の扱いも心得ていないようで、残念だ」

挑発的な物言いに対し、彼を前にしたその男はくすくすと嫌味に笑う。

「いや、これは失敬。ロタール連邦のルカル大佐殿ともあろうお方だからな。きっと自決用の道具も多数軍服に仕込まれていると思っただけ」

その男の言葉に、捕まっている男——ルカルは忌々し気に舌打ちをした。

実のところ、服だけでなく、彼の身体にも自決用の毒薬は仕込んでいたのだが、その全てが没収されてしまっていた。

いざという時は自分の命さえ捨てることを躊躇わない彼だったが、その手段を封じられてはどうすることもできないのだ。

ロタール連邦軍に所属するルカル大佐は、一週間前まで東部域前線司令官として、戦線を支えていた非常に模範的な軍人だった。

だが一週間前に起こった戦闘で、東部戦線は敵対するアウライ帝国によって壊滅的な被害を受けてしまった。司令部から命からがら脱出したルカルは、山中に逃れて潜伏していたが、とうとう捕まってしまったのだ。

怪しげなアウライ帝国の調教師を名乗る男は、拘束されたルカルの前で、悠々とその経緯について説明していた。「お前からは我が軍に有益な情報が存分に聞き出せそうだからな。態々このオレが出向いて来てやったわけだ」その言葉に、ルカルは苦い顔をする。確かに彼は前線司令官として、決して敵に渡してはならない情報も多数握っている。

本来であれば捕虜となってしまう前に自ら自決しなければならぬくらいの情報源なのだ。

実際彼もその覚悟は決めて戦地に赴いていたわけだが、残念ながら敵の行動の方が速く、自決を決断する前にまんまと捕縛されてしまった。

「……敵国を利用する情報提供など、私がすると思ったのか？」  
時間の無駄だ、と吐き捨てるルカル。

「それともアウライ帝国の者は無駄なことに時間をかける無能ということか？」  
拘束され、自決の手段も奪われた今、ルカルが出来るのは挑発することだけだ。

出来る限り口汚く相手を罵って、苛立たせることが出来れば、まかり間違って彼を殺しにかかることがあるかも

しれない。

そんなルカルの思惑は、調教師には筒抜けであった。

「そこはもつと相手の感情に響くような罵倒をしないと。まあ、育ちのいい実に模範的な軍人だったようだから、無理な話かもしれないが」

逆に馬鹿にしたように応えられ、挑発を受け流されてしまう。

ルカルも自分の発言に棘が足りないことは自覚していたのか、悔し気に歯を食い縛った。

そんな彼の様子を見ていた調教師は、意味ありげに笑いながら、背後に突き従えていた女性を振り返る。

「懐かしいな。ハク、かつてはお前もこんな感じだったっけなあ？」

話を振られたハクと呼ばれた女性は、かつての自分を恥じ入るように俯いていた。

「いじめないでくださいませ、ご主人様。当時の私は、ご主人様の偉大さを何一つ理解していなかったのです」

ルカルはそんな風に告げるハクを訝し気に見つめる。

(……いまの話からすると、彼女も私と同じように捕まった人間ということになるが……アウライ人、だよな?)

見事な銀髪と紫の瞳は、アウライ人の特徴である。

その美貌といい、豊満なプロポーションといい、仮にロータル所属の人間だったとして、噂になっていないはずがない。

ただ、その見知らぬ人物であるはずの彼女が、自分に向ける視線に妙な感情を込めているのを、ルカルは敏感に感じ取っていた。

彼女の視線は見知らぬ者を見ている視線ではなく、知っている者を見る視線だったのだ。明らかに知己であると示している。

(会ったことは、ない。ない、はずだが……なぜこんなにも引つかかる……?)

そんな疑念が表に出ていたのか、調教師はハクの方を抱き、その豊満な胸を無造作に鷺掴みにした。

突然の狼藉にも、ハクは全く動じない。というよりは、弄ってもらえる喜びを浮かべ、調教師の行為を受け入れていた。

それはとても一人の人間として喜んでいい扱いはないはずだった。

そんな売女にも等しい対応に素直に順応している彼女の姿に、真面目な軍人であるルカルは顔を顰める。

「……仮にも捕虜への尋問をしようというときに、女の体を弄るような行為をするのはどうかと思うが」

職務中ではないのか、とルカルは攻撃的に噛みつく。そんないかにも真面目な軍人らしいルカルの反応を、調教

師の男は面白そうに嘲笑った。

「ははっ、安心しろ。お前もいずれこうなる。その時にこいつの気持ちが理解できるようになるさ」

その言いように、ルカルは余計に混乱せざるを得ない。

「こうなる……? その女のように、貴様に媚びを売るようになる……? 訳が分からぬことを……」

「まあ、言葉で説明するより、始めた方が早いな」

調教師の男が合図すると、ルカルが拘束されている台が動き始める。

拘束された格好のまま、彼の体は移動し、そして円筒形のカプセルの中にそのまま固定されていった。

「お、おい、なんだこれは！ 何をするつもりだ！」

不安になったルカルは思わずそう叫んだが、調教師は聞く耳を持たない。

「やはり拘束台に拘束したまま設置できるようにした改良は正解だな。いちいち抑え込む人手も要らないし。今後この方式で行くでしょう」

「承知しました。正式な申請として処理しておきます」

そんな風に調教師とハクが言葉を交わしている間に、カプセルの扉が閉まった。外の音が遮断され、ルカルは何も聞こえなくなる。

（くっ……一体何をやる気だ……？ 先ほど見えた、培養液に着けられた者たちのように、濡れさせるつもりか……？）

そう考えている彼の足元から、どろりとした粘性を持った液体が溢れ出した。

その水はルカルの肌にじりじりと刺激を与えて来て、明らかにただの液体ではなかった。

瞬く間に身体の大半が液体に浸ってしまう。

「水責めか……拷問としては、実に効果的ではあるが……」

殺し切らずに苦痛を与える方法として、水責めは確かに効率的だった。

彼も決して綺麗なだけではない戦争の当事者として、そういった方法があることは重々承知の上だ。

（だが祖国を裏切るつもりは、絶対がない……！ 例え地獄の苦しみを与えられようとも、私は祖国に殉じて死ぬ……！）

そう硬い決意を抱く彼の頭が、とうとう液体の中に沈んだ。

ルカルは目を閉じ、息を止めて暫く耐えていたが、永遠に息を止めておくことは人間には出来ない。

ガボツと一度空気を吐き出すと、一気にその肺を液体が満たし、さらに地獄の苦しみへと——ならなかった。

(なん、だ……？ どうして、息が出来ている？ いや、息は出来ていないが、苦しくならない……？ 頭が、妙にクリアだ……)

それは液体がただの水ではなく、特殊な構造の液体だったからなのだが、彼にそんなことまではわからない。

ただ、呼吸せずとも生きている不思議にルカルが意識を向けられていたのは、少しの間だけだった。

カプセルの中が完全に液体で満たされた後、ルカルは自分の胸に異様な痛みを感じ、思わず目を開けた。

液体は一瞬目に染みたが、すぐにその刺激に目が慣れ、水の中で目を開けたのと同じくらいの視界は確保された。

その目で、自分の体に視線を落とすルカル。そこには、信じがたい光景が広がっていた。

カプセルの上部から伸びて来た一対のチューブが、彼の胸にその先端の針を突き立てていたのだ。

乳首を正確に貫いており、彼は想像していなかった痛みに動揺する。

その針が繋がっているチューブ内は、何やら怪しげな液体が移動していた。

チューブ内の液体が彼の胸に注がれていく。

(ぐ、ぐおおっ……！ なんだ、これは……ッ。何を、しているんだ……ッ)

彼は一瞬自分の意識が遠ざかるのを感じた。類稀なる精神力で何とか堪えたが、彼以外であればあっという間に意識を失ってしまったであろう。

(ぬ、うううっ！ 思い通りには、ならんぞ……ッ)

そう彼は考え、意識を保っていたが、それはかえって彼に非情な現実を突きつけることになった。

注ぎ込まれた液体によって、彼の胸は内側から軽く膨らんでしまっていた。それだけならまだしも、彼の体は全身が熱くなり、血管が沸騰して、骨が溶けてしまいそうなほどの感覚になっていた。

頭が熱でガンガン痛み、何度も意識が朦朧として気を失いそうになる。

(ぐう、うっ、うおおっ、おおおっ！)

それでも気を失わない彼の精神力は、間違いなく常人を超えたものだった。

それがより鮮明に彼の絶望を煽ることになるのだが、ルカルは意地でも意識を保っていた。

カプセルは、女体化ポッドと呼ばれている。

中に格納した者に特殊なナノマシンを注入し、女体化させてしまう悪魔の技術の結晶だ。

それに放り込まれた者は、瞬く間に意識を失い、一日経った頃にはすっかり女体化して取り出される、というのが、一般的な流れだった。

実際その流れで女体化させられたハクは、自分と違い、長い時間意識を保ったままでいられているルカルの姿に、素直に感心していた。

「さすがはルカル大佐ですね」

「お前の元上司だったか？」

「はい。少しの間ではありましたが、指導していただいております」

「ふふっ、まあだからこそ、こいつの調教はお前に任せることにしたんだがな」

「お任せくださいご主人様。必ずや、私と同じく性的快楽に夢中にさせて御覧にいきます。ですから……」

そう呟くと、しなを作って調教師の男に擦り寄るハク。

彼女の眼は発情した猫のように潤んでおり、期待に目を輝かせていた。

「くっくっくっ。この盛りのついた雌が。まずは宣言通り、こいつを墮としてからにしろ」

そうでなければ『お願い』など聞いてやるつもりはない、とばかりに調教師の男はハクをにべもなく振り払う。

ハクは残念そうに眉を寄せたが、その目は調教を確実に終えてやろうという情熱に燃えていた。

そんな彼女の姿を、調教師はとても楽しそうに眺めている。

カプセルの中で液体漬けにされてから、どれくらいの時間が経ったのだろうか。

いまだに強固な意思で意識を保ち続けているルカルだったが、それがゆえに自身の体に生じている恐ろしい変化を目の当たりにしてしまっていた。

(な、なんだ、これ……っ、どうして、私の、胸が……ッ)

彼の元々の身体付きは筋骨隆々とまではいかずとも、軍人として恥じることはないしっかりとしたものだった。

胸板も薄くはなく、むしろがっしりとした頼りがいのある、男らしいものだったと言えるだろう。

だが現在、彼の胸はおかしなことになっていた。

筋肉の盛り上がりが目に見えて小さくなり、チューブのついた針が突き刺さっていた部分を中心に、まるで女性のような柔らかな脂肪で膨らんだ胸になっていた。

先ほど胸の内側に液体を注がれ、その液体によって胸が膨らんでいたのとは全く違う。明らかに揉めてしまいうな、柔らかな膨らみを持った胸に変わっていた。

目に見えて変わったのはそこだけではない。

彼の股間部分にも大きな変化が表れていた。

彼が密かに誇りに思っていた大きさと太さを有する陰茎は、その大きさをかなり減じていた。

寒い時に縮こまってしまう生理的現象での縮小は、ルカルも経験があるが、その時と比べても明らかに小さい。

どうみてもその部分の質量が減じてしまっており、彼の自慢のそれは小さくなっていた。

ごつごつとしていた骨格もその角ばった部分を失い、丸みを帯びたものに変わっていつている。

健康的に焼けていた肌の色も色素が薄くなり、女性のそれに近づいていた。

(何が、どうなっている、んだ……っ！)

悪い夢でも見ているのかと彼は感じ、夢なら覚めて欲しいと心底願っていた。

だが、そんな彼の願いとは裏腹に、彼自身の体の変化は続く。

液体に漂っていた彼の短かった髪が、自然にしても彼の視界に入るようになってきた。髪の毛が伸びているのだ。

ギチギチに締められていたはずの拘束具が、微かに緩む。手足の太さが細くなっていることを彼は感じた。

なお、緩んだ隙に拘束具から手足を抜き取れそうだったが、拘束具は抜けられる前に再び締め付けて来て、彼を決して逃がさなかった。

そうやって時間を置いて改めて締め付けてくるため、ルカルは自分の手足が細くなっていることを気のせいでもなんでもない、嫌でも実感させられてしまっていた。

(ぐ、うううう、くそっ、この、ままでは……ッ)

自分の体がどんどん作り変えられていくことを実感するルカル。

そんな彼の股間が、異様な熱を発し始めた。

(フグウウウウツツ!?)

もし声が出せたとしたら、とんでもない悲鳴をあげてしまっていたことだろう。それくらい、彼の股間を襲った感触は凄まじかった。

例えるなら、思い切りキンタマを蹴り上げられた時のような衝撃が、彼を襲っていた。

(おうっ、おごおっ、うごおっ)

頭の中の思考すらまとまらなくなるルカル。

彼には見えていなかったが、現在彼の股間では最大限縮こまった陰茎と睾丸が、その体の中に押し込まれるようにしてめり込んで行っているところだった。

結果、その部分が押し潰されるような痛みを発し、彼を追い詰めているという始末だった。

陰茎と睾丸が体内へ押し込まれた結果、彼の股間は外に出ている器官が何もなく、見た目は非常に女性器の

それに似通ったものになっていたのだが、それをルカルが認識するのは、まだ暫く先の話だった。

彼は陰莖と睾丸が体内に収納される激痛によって、とつとうその意識を手放すことになってしまったからだ。

彼が意識を失った時点で、傍から見れば彼の体は——ほぼ女性のものであった。

## 第二話 女の肉体

ルカルは最初、目の前のカプセルに反射している人の姿が自分のものであると認められなかった。

最初はそのカプセルの中に別の誰かが閉じ込められているのではないかと思ったのだ。

だが、その目の前の見知らぬ『アウライ帝国人の少女』は、ルカルが手を動かすと、その通りに——鏡写しに動いた。

その動きは確かに鏡像そのもので、その存在が反射した自分の姿だと嫌でも認識させられる。

それでもルカルは、目の前の存在が自分自身だと認められなかった。

帝国人の象徴である銀髪は長く、男らしく切りそろえていた元々のルカルの髪とは違い過ぎる。

瞳の色は紫色で、これも帝国人の象徴だ。

何より、何も身につけていない体は、明らかに女性のものだった。

丸みを帯びた肩や、折れそうなほどに細い手足、それほど目立たないとはいえ胸の膨らみもあり、骨格や体つきからして女性のものになっていた。

さらに極めつけには、股間にあつたはずの、彼の男性としての象徴が何もなくなってしまうていた。

つるりとした股間には陰茎も睪丸も何もなく、陰毛すらない。

ただまっさらな股間に、割れ目があるだけだ。

ルカルとて一人の成人男子として、それが女性器であることなど当然知ってはいたが、それは自分にあるべきも

のではなかった。

変わり果てた自分の姿を、呆然と見つめるルカル。

そんな彼の様子を、調教師の傍に立っていた帝国人の少女が眺めている。

その表情はあまり動かず、捕虜の様子を監督する真面目な表情であったが、どこか懐かしいものを見ているような視線だった。

彼女の意味ありげな視線にルカルは気付かないまま、自分の姿を見て、声を失っている。

そんなルカルに、少女が声をかけた。

「そろそろよろしいでしょうか？ 『状況の把握は迅速に』、あなたならその言葉通りに行動できると思うのです  
が」

その皮肉めいた言葉を受け、ルカは呆然自失状態から回復した。

彼女の言った言葉は、ルカルが部下を指導する時に言い聞かせている言葉だったからだ。

(その程度の情報は帝国として握っているだろうが……わざわざここでそれを口にする辺り、質が悪い奴だな……

っ)

あてこすりもいいところだ。

睨み付けるルカルに対し、少女は何も感じていない様子だった。

実際、いまの少女の見た目をしたルカルが睨んだところで、威圧感ほぼない。

それまでの軍人らしい見た目ならばともかく、いまのルカルは力無き少女でしかないのだ。

そんなルカルに睨まれたところで、その少女には何の威圧にもならなかった

特に、かつてのルカルに叱責された経験がある者であれば、それも当然と言えるだろう。哀れみにも似た感情を込めた瞳で、少女はルカルを見ていた。

そんな視線を向けられる理由はわからないまでも、侮られていることだけは理解出来る。ルカルはいつ反撃を試みるべきか、悩んでいた。

カプセルから出される際に、拘束は解かれている。

上手く隙をついて少女の首を捉えることが出来れば、彼女を脅して脱出することも出来るかもしれない。

そんな風に反抗の意思を失っていないルカルに対し、少女は静かに頭を下げた。

「ご主人様はお忙しい方ですので、あなたの調教は私が担当いたします。……なるべく早めに諦めて従った方が楽ですよ」

後半の言葉は彼女の心からの言葉だったが、当然ルカルがそれに頷くわけもない。

「だれが……ッ！」

「その姿で、抵抗出来るとお思いですか？ それに、仮に脱出に成功したところで、他の人間にあなたとして証明できる手段はありません。間違いなく、悲惨な運命しか待っていないと警告させていただきます」

力もなく、身分もなく。

仮に本国の司令部に戻ることが出来れば、覚えている機密の内容などで自分のことを証明することは出来るかもしれないが、そこに至るまでの道のりが問題だ。

どこにでも不埒なことを考える者はいる。ましてや帝国人としか見えない今の自分の姿では、ろくに話も聞いてもらえないだろう。

そのことを彼女が言っているということは、説明されるまでもなくルカルも理解出来ていた。

「それはどうも御親切に。ありがたい慈悲に涙が出るよ」

「いずれ泣いて感謝することになりますよ」

皮肉をさらりと受け流した少女は、改めて頭を下げる。

「私の呼び名は『ハク』と言います。あなたの調教係として任命されました。ここまでは不問としましたが、今後は立場を弁えた発言をするように。ハク様と呼びなさい」

「……………」

ルカルは何も言わなかった。変わらず隙を伺っている。

（とにかく、まずは隙を見つけないと……）

そう思つてハクと名乗った少女の隙を伺うルカルだったが、少女の見た目をしているにも関わらず、ハクに隙はほとんどなかった。

いかにも非戦闘員のような姿をしているのに、彼女から感じるのは軍人のような気配だった。

（相手も馬鹿ではないということか……ん）

ルカルは小さくしゃみをしてしまう。

いままでは状況を把握するので精一杯だったが、いまのルカルは全裸だ。

施設内はそれなりの室温が保たれているものの、全裸でいけば体が冷えるのは当然だった。

そんなルカルの様子を見てか、ハクが衣服らしきものを取り出してくる。

「いつまでもその貧相な姿を晒されても困りますし、これを着なさい。特別に調整されたスーツです」

ルカルはとにかく服が着られるのなら、全裸よりはマシだろう、と考えた。

脱出するにしても何をやるにしても、裸では具合が悪い。

そう思っ、とりあえず素直にそれを着ようとそのスーツを広げてみて——絶句した。

「な、な、なんだこれは！」

広げてすぐその服が普通の囚人服でないことはわかった。

それは端的に言い表すのであれば、バニーガールの衣装だったからだ。

ハイレグ気味に食い込む形。胸元どころか、肩や背中も大きく開いているデザイン。

踵の高いブーツに、網状のタイツやガーターベルト、両手を肘まで覆う手袋、首元に着けるネクタイのついたチ

ョーカー。

色は派手な紫色で、どこからどうみても、そういう趣向の『夜の店』で働くバニーガールでしかなかった。

「ふざけるな！ こんな服、男が着れるわけないだろう！」

「まだご自分が男性であると思ってるのですか？ お似合いですよ」

皮肉にしては馬鹿にするような響きが強すぎた。

「こんなものを着るくらいなら、裸の方がマシだ！」

そうやって服を投げ出そうとしたルカルだったが、それより早くハクが動いていた。首に巻かれた金色の首輪にその指先を触れさせる。

「命令です——『着なさい』」

その言葉をルカルが耳で認識すると同時に、彼の体は勝手にスーツを着始めた。

「な……ッ」

ルカルの体はいくら彼自身が動かそうとしても動かず、ハクに言われるまま、バニーガールの衣装を身に付けて行ってしまう。

（バカな……ッ、こんな、人を自由に操る技術……っ！ 帝国は、どこまで技術を進歩させているんだ……っ）  
その顔に驚愕した表情を浮かべるルカルに対し、ハクは自分の首に巻いている金色の首を指さして言う。

「これは命令装置マリオネットと言って、あなたの体内にあるナノマシンに命令を送るための装置です。これを起動して放たれた指令を受諾したあなたの体は、私の命令を忠実に実行します。意志の力で抗おうとしても無駄ですよ」

その事実震撼するルカル。こんな技術があるのであれば、一度彼らに捕まったら脱出は相当難しいということだ。

隙をついて逃げ出そうとしていたルカルはその事実には歯噛みする。

一瞬絶望しかけたが、すぐに持ち直していた。

（いや……まだ、逃げられる可能性はある）

もし仮に完璧に人を操れるのであれば、尋問するのにもわざわざ調教の手間暇をかける必要はない。無理矢理機

密を喋らせればそれで事足りるからだ。

つまり、本人の意思に反して、無理矢理喋らせることは出来ないということだ。

(加えて、命令は逐一しなければならぬはずだ。命令には具体性を持たせるか、時間制限があるのか、何かがある)

無条件に命令が可能なら、最初に一言『私の命令に全て従え』という命令を出しておけばいいだけのはずだからだ。

一言で動きを制限されてしまうのはかなり厳しい状況だが、だからこそ相手は油断しやすくなる。

ルカルはそう考え、反抗の炎をますます燃え盛らせるのであった。

(必ず生きて、この情報を祖国に持って帰る……私は、負けない……!)

そんな風の中で男気を燃やしている間にも、ルカルの体は動き続け、バニーガールの衣装としか思えないスーツを身に着けてしまっていた。

完成されたバニーガールの美少女の姿に、それを見ていたハクは頬に手を当てて息を吐く。

「そちらは試作品で、ご主人様の趣味が色濃く反映されているのですよね……」  
羨ましい、というような気持を隠す様子もなく、ハクは呟く。

嫌味に受け取ったルカルは、苦々しい顔を隠そうともせず、応えた。

「羨ましければ、いくらでも代わるが?」

「そもいかないのが、悲しいところです」

ルカルの嫌味を受け流したハクは、バニーガール姿になった彼をまじまじと眺める。

「問題はなさそうですね。バニーガールとしては、少々胸のポリウムが足りないようですが……いずれ問題なくなるでしょう」

胸のポリウムが足りない、と言われても、元が女であったならともかく、元が男であるルカルには何の痛痒つうようも感じない。

ただ、後半の『いずれ問題なくなる』という言い回しには不穏なものを感じざるを得なかった。

バニーガール姿になったルカルは、ハクに促され、独房へと連れていかれる。

その部屋は想像よりは綺麗で、こじんまりとはしていたが、必要最低限の設備は整っているようだった。

「暫くここで待機していなさい」

ハクはそういうと、部屋の扉を閉めて去って行ってしまった。

扉は電子錠で、道具があったとしても弄る余地が全くないものだった。

これから恐らく激しい尋問がされるはずだと思っていたルカルにとって、放置されるのは予想外過ぎた。

(……捕虜は一部屋ずつ与えられているのか。声が届くほどの近くには……いなさそうだな)

捕虜同士で結託して脱出を試みることは出来なさそうだ。

ルカルは独房のベッドに腰掛ける。独房にあるにしては、ベッド自体の質はそう悪くはなかった。

無論いいわけでもないが、十分普通に寝られそうな質感だ。

視線を下に落とすと、屈辱的なバニーガールの衣装を着せられた自分の姿を直視することになるため、ルカルは

天井を仰ぐ。

「絶対に……負けるものか」

いずれここから脱出してやるのだという、彼の決意は、まだ固かった。

## 第三話 調教スーツ

独房で出された昼食は、質素ではあったが普通に食べられるものだった。

その昼食をすっかり摂ったルカルは、いよいよここでどんな扱いをされるのかがわからなくなってきた。もつと激しい尋問や厳しい扱いを想定していたのだ。

体を根本から作り変えられているのだから、ある意味ではどんな扱いよりも酷いともいえるが、それと扱いが一致していない。

昼食後に休憩時間が一時間も与えられるということを知り、ルカルはますますわけがわからなくなる。

(もつと心身ともに追い詰めて来ると思ったんだが……これなら、十分耐えられそうではあるな)

独房の中で腕を組み、部屋の隅から隅までを見て回るルカル。

何か脱獄のためのヒントやきっかけがないかを探していた。

(カメラはないようだが……こんな人を操れる機械を作れるくらいだ。恐らく確実にどこから見られている…

…)

その位置さえわかれば、脱出の算段も考えやすいだろう。

そんな風に考え、脱出のための努力を続けていたルカルだが——不意に、その体に異変が生じ始めた。

どくん、どくん、と勝手に心臓が早鐘を打ち始める。

(っ……っ？ 不整脈、か?)

体を作り変えられているのだから、負担も大きなものだったはずだ。どんな不調が現れても不思議ではない。そう思って、胸を抑えたルカル。それはあくまで、激しく高鳴る心臓の鼓動を感じるための動きだった。少なくとも、ルカルはそのつもりだった。

しかし、彼の手は彼の意思に反して、自分の胸を揉み始めた。

「んうっ!? な、んだ、これ……っ」

慌てて手を離そうとした彼だったが、彼の意思はその手に反映されなかった。

勝手に手は動き続け、ルカルの控え目な膨らみを揉み続ける。

ルカルは自分の体が自分の意思で動かないことに動揺しながらも、もう片方の手で胸を揉む手を引き剥がそうとした。

だが、もう片方の手が向かったのは、腕ではなく、自分の股間だった。

指先から掌で擦り上げるようにして、スーツの上から刺激を与え始める。

「ひあぁっ!? ど、どうしてっ」

混乱し、動揺するルカルの足が勝手に動く。

ベッドの上に腰掛けると、両足もベッドの上にあげられて、はしたなくM字開脚をしてしまうことになった。

その上で手は胸を揉み、股間を摩っているのだから、傍から見ればルカルがオナニーを始めたようにしか見えなかった。

だが当然、ルカル本人は自分の体の動きに驚愕し、必死に止めようと歯を食い縛っている。

無論それで何が変わるといふことはなく、彼女の手は動き続けていた。

(く、う……！　何か、知らないうちに命令されて……？　い、いや、それにしては、おかしい……っ)

ルカルは自分の手が与えて来る快感を堪えながらも、思考を巡らせていた。

このスーツに着替えさせられた時のような形で体が動かされているのだとすれば、身体の自由は全く利かないはずだった。

だがいまは、手足以外の身体、特に首から上は比較的自由に動かすことが出来ている。その時の動かされ方とは、全く違うのだ。

(言葉で命令する以外にも、こちらの動きを制限する方法があるっていうのか……！?)  
ルカルの推測は正しい。

現在彼の体を動かしているのは、彼女の身体に注入されたナノマシンの効果ではなく、彼女が着ている調教スーツだった。

かつての調教スーツは、スーツそのものが蠢いて着用者の性器を開発するものだった。それはそれで一定以上の効果を発揮していたのだが、無理矢理開発されているという意識になりやすく、最大の効果を発揮するとは言い難かった。

そこで開発されたのが、ルカルが身に着けている試作品の調教スーツ。

指定した時間に自動的に性器開発を行うのは同じだが、その方法が違う。

このスーツは、着用者本人の手足を自在に動かして、その手で性器開発を行わせるのである。

電磁パルスで手足を動かさなければならぬ関係上、ルカルの着ているものがそうであるように、長手袋とタイツは必ず身につけなければならなかったが、その欠点を補って余りある効果を発揮していた。

なにせ、従来の調教スーツと違い、着用者の性器を弄るのは本人の手足なのである。

無理矢理動かされているとはいえ、感覚などはそのまま残っており、自分で自分の体を弄っているという印象は従来のものより遥かに強い。

さらにその効果は、効率的に女性の自慰の仕方を覚え込ませることに一役買っていた。

元が男性である着用者は、女性器を自分でどう扱っていいかわからない場合がほとんどだ。知らないことは誰かが教え込む必要がある。

しかしこの調教スーツがあれば、自動的に女性の自慰の仕方を体に覚え込ませることができる。

その結果、調教は遥かに容易に進むことが予想されるのであった。

手が、止まらない。止められない。

「……ッ、んっ、く、あう……っ」

ルカルの手はまるで熟練の娼婦のように、躊躇いのない動きで自身の胸や性器を刺激してくる。

揉みしだくようにして乳房を刺激したかと思うと、優しく先端を摘まんて擦り、こりこり、と音をさせるほどに固くなった乳首をさらに刺激する。

股間はただ外を摩っているだけかと思えば、指先を体の中に押し込むようにして刺激を変え、さらに奥まで快感を響かせて来る。

あまりの巧みさに、ルカルは悶えることしか出来なかった。

(や、やばい……とめなきゃ……っ、と、ま、れえ……ッ)

マリオネッターによる操作と違い、この調教スーツの操作はまだ抵抗しようのある操作だった。

結局抵抗出来ていないという結果には変わりないのだが、確かに神経が通っていて、止めようという指示は出せているのがわかるからだ。

それ以上の強制的な指示がスーツから発されているため止められないだけで。

そんな風に弄り続けていると、ルカルは徐々に自分が変な気分になり始めていることを感じざるを得なかった。

(なん、なんだ、これっ……!! こんなっ、知らないっ)

ゾクゾクとする快感が背筋を上り、頭へと浸透してくる。

身体が勝手に跳ね、気持ちよさが弾けて視界が白く染まった。

それが軽く絶頂した状態のだと、元が男のルカルにはよくわからなかった。

ただ、頭の奥が痺れて、思考が乱されるのを感じた。

「ぐっ、く、うっ、んんう……っ!」

思考を落ち着かせようと必死になるルカルだが、その体は彼女の意思に反して動き続ける。

腰が勝手に跳ね、感じる快感はさらに強まっていった。

「はあっ……！ はあっ……！ はあっ……！」

荒い呼吸を繰り返す。それはルカルが絶頂寸前まで追いつめられていることを示唆していた。

(やば、い……っ、なにか……っ、く、る……っ)

すぐに大きな絶頂が訪れることを感じ、ルカルは恐れ戦く。

だが、その寸前で彼の手足はぴたりと止まってしまった。

想定外の状況に、彼は動揺してしまう。

絶頂寸前だった身体の興奮が、再び収まっていく。

ちゃんと絶頂出来なかったことに、ルカルは安堵しかけるが、すぐにその体は再び動き始めた。

ぐちゅぐちゅ、と大きな音を立てて自分の股間を劈り、痛いほど尖がった胸の先端を刺激してくる。

収まりかけていた絶頂の興奮が再びルカルに襲い掛かってきた。

「ふ、くあ……っ！ んぐ、う……ッ！」

ルカルの体は瞬く間に再び絶頂寸前まで導かれた。

今度こそ絶頂してしまう——というところで、また手の動きは止まった。

その時ルカルは、僅かではあったが「惜しい」と思ってしまった。

そのことに自分で気づいた彼は、慌てて首を振り、その思いを打ち払う。

(惜しい、じゃないだろう……！ イカされないなら、それに越したことは……はうっ!?)

冷静な思考がそう囁くのを、指の動きが邪魔をする。

指はルカルの股間を撫で摩ることで刺激していたが、そのスーツの股間部分を横にずらし、ルカルの股間を外気に晒した。

彼女のぴっちりと閉じた性器からは透明な液体が滲み出しており、それが女性の感じた時に出る愛液なのだということはルカルにもよくわかっていた。

自分が感じてしまっているということを改めて理解させられたルカルは、羞恥のあまり赤面したが、すぐにそれどころではなくなってしまう。

勝手に動く彼自身の指が、中指をその穴の奥までずぶずぶと挿し込んで来たからだ。

「……ッ！」

それは男性であるルカルが本来であれば感じることのない感覚だった。

スーツの上から軽く押し込まれた時とはまるで違う。ずぶずぶと体の奥まで指が到達する感触は、普通なら絶対に味わうことのないものだ。

さらに彼にとって恐ろしいのは、挿入に際して、痛みが全く生じなかったということである。

それどころか、異様に気持ちのいい感触が彼の全身を駆け巡り、思考を千々に乱すほどに感じてしまったのだ。

「あ、あ、あ……ッ」

意味のある言葉を紡ぐことも出来ず、ルカルは呻く。

その間にも彼の指は葉指までもが彼の中へと入っていった。

体の中が押し広げられる感触。擦れ合う指と指。膣の中で生じたその感覚は、ダイレクトに頭に響く。

眼を見開き、痙攣するルカル。体の中に挿入したその指を、自分の体が――膣が締め付けるのを感じた。

それが女性器の感覚であると、ルカルはハッキリと理解させられたのだ。

（こんな、こんな状態で、動かされたら……ッ！）

いよいよ女としての絶頂を覚え込まされてしまう。

それだけは嫌だと、ルカルは抵抗していた。何とか引き抜く方向に腕を動かさせないか、もう片方の腕も含めて動かそうと懸命になった。

だがそれは叶わない。

胸を揉みしだく手は変わらず胸を揉み続けている。時折揉む乳房を変え、左右均等に刺激を与えていたが、それは彼の望む変化ではない。

股間に挿し込まれた指の方も、彼の言うことは全く聞いてくれなかった。

ただひたすらに、膣内で蠢き続け、快感をルカルに与え続ける。

ルカルは思考する余裕もなくなり、ただその快感に耐えることしか出来なかった。

何度も何度も、小さな絶頂といえる波は訪れた。

しかし肝心の大きな波が来そうになると、彼の体は相変わらず動きを止め、ルカルをその高みに持ち上げることがはしてくれなかった。

考える余裕もなくなり、徐々に快感に流されるだけの状態になりつつあったルカルが、「どうしていかせてくれないのか」と思うようになったのは必然だっただろう。

(あと、少し、なのに……ッ)

膣に挿し込まれた中指と薬指が、膣内の愛液をかき混ぜて激しい水音を立てる。

絶頂寸前で、またびたりと止まった。

その時、ルカルは思わず自分の意思で指を動かしていた。

あと一歩、を何度も示された結果、ついに自分で指を動かそうとしてしまったのだ。

ぐちゅっ。

「ふあっ!?!」

そして、それは叶った。どう足掻いても動かせなかった指が、彼の意味で動いたのだ。

その時の彼の心境は、非常に複雑なものだった。

そのまま指を抜くべきだと理性が囁き、弄ってしまえと本能が煽る。

動かせなかった指に選択肢が生まれたことで、彼はかえって追い詰められた。

「ふ、う、う……ッ」

誇り高い軍人の矜持がギリギリのところまで彼の行動を制している。

それはまさに崖っぷちだった。あと一押しあれば、あっさりと転落してしまうような、そんなギリギリの綱渡り。

そんな彼の背中を突き飛ばしたのは、彼自身の、もう片方の腕だった。

胸を刺激していたもう片方の腕は、乳首を指先で摘まみ、軽く捻るといふ最大の刺激をこのタイミングで与えたのだ。

「ひゃ……ッ、ああああッ！」

それが最後のトドメとなった。

ルカルは自分の意思で自分の指を動かした。

愛液が掻き回され、膣壁と指が擦れ合う激しい快感が生まれる。

全身を快感が駆け巡り、彼女は仰け反って涎を垂らしながら、激しく痙攣しながら絶頂してしまった。

頭の中が真っ白になり、一瞬感覚が全て消える。

そのあとで、全身を跳ね回らせるほどの快感が駆け巡った。

「ウアッ、ああっ、んあっ、ひあああッ！」

そして、一度動き出した手は、もう止まらなかった。

ルカルが一度でも自分の意思で自慰を行うのがスイッチだったのか、そこからはどれだけルカルが止めようとしても、一切妥協せずに彼女の手足は動き続けた。

連続で何度もいかされ、呼吸ができなくなるほどいかされ、体がほとんど動かなくなってもいかされて。

絶頂させられ続けたルカルは、まともに考えることも出来ないまま、その日一日自慰を続けてしまっていた。

絶頂のし過ぎで意識を失う寸前——頭の中に何かが染み込んでくるような感覚があったが、ルカルはそのことを全く意識出来ていなかった。



#### 第四話 ハクの淫乱雌調教

ルカルが再び目を覚ました時、彼は胸に違和感を覚えた。

視線を下げると、自分の膨らんだ胸が目に入る。

女の体にされてしまったことを意識してしまうため、なるべく直視しないようにしていたのだが、何か妙に感じた。

(……おかしいというなら、そもそもこんな膨らみがあるのがおかしいのだが)

溜息を吐いたルカルは、改めてその胸をじつと見る。

違和感の正体には、すぐに思い至った。

(どういうことだ……？ 大きく……なってる？)

ルカルの胸は最初から膨らんではいたが、そう大きな膨らみではなかった。

男性の胸とは全く違うとはいえ、そこまで目立つ大きさではなかったはずなのだ。

しかし現在、ルカルの胸は明らかに当初より大きく膨らんでいた。

カップサイズでいえば、Cくらいにはなっているだろうか。巨乳とまでは言わないが、十分な胸の大きさであるとは言える。

そんな胸の変化にルカルは戸惑い、その大きさをしっかりと把握できるように、自分の手を乳房に被せてみた。先ほど強制的に自慰をさせられた時に胸を掴んでいたため、その変化を明確に感じ取ることが出来た。

(やっぱり、大きくなってる……これは、一体、どういうことなんだ?)

ルカルが想像していなかった現象に戸惑っていると、彼の独房にハクがやって来た。

「おはようございます。……昨日はスーツの効果も十二分に味わえたようですね」

そういうハクの視線は、ルカルの胸に向いていた。

実は、ナノマシンはその浸食度合いによって、対象の胸が大きくなっていくように作られていた。

ゆえにそこを見ればどの程度ナノマシンがその体を浸食しているかは一目瞭然というわけだ。

その事実をルカルは知らなかった。ただ、不躰な言葉をかけられて不快に思うだけだ。

「やはり、このスーツが何か影響していたのか……」

「気持ちよかったですか？」

「そんっ、そんなわけが、あるかっ！」

ルカルはそう吠えた。だがその様子から、本当はどうだったかは容易に想像がつく。

そんな強情なルカルの様子を見つつ、ハクは深々と溜息を吐く。

「まだ試用段階とはいえ、自身の手で気持ちよくなれるのは正直羨ましいですけどね」

「なにを、言っている……?」

「私の時は、もっと無機質な開発のされ方でしたから。とても気持ちよくなりましたけれど、もっと自身の手でもやってみたかったですね」

ルカルは最初、揶揄されているのかと感じた。

ハクは自身の経験に照らし合わせてそう言っているだけなのだが、まだ心までは堕ちていないルカルにとって、『羨ましい』などと言う言葉は向けられたところであまり嬉しくないものだ。

「……おい、貴様。やはり、貴様も私と同じ、ロタール人の捕虜……だったのか？」  
初対面のときから引つかかっていたことだ。

そのことを問いただしたルカルに対し、ハクは事も無げに頷いて肯定する。

「昔の話ですが、その通りですよ。いまはこの境遇を受け入れていますが」  
というか、とハクは少し呆れたような顔になってルカルに向けて言う。

「あなたと似たような姿と格好をしているのに、元からアウライ人だと思っていたんですか？　どんな痴女ですか？」  
「っ、確かに、違和感があったが……いや！　そうではない！　貴様も元はロタール人だというのなら！」

「ですから、昔の話なんですって」

ハクはやれやれ、と呆れたように呟く。

「まだ自分がロタール側の人間であるつもりなんですなあ……まあ、わかりますよ。私も中々受け入れられませんでしたから」

でもね、とハクは続けて囁く。

「あなたもいずれは偉大なるアウライ帝国の元にかすず傳くことになるのですよ」

その目にはかつての同胞と思われる要素は何もなかった。妖艶な笑みを浮かべ、瞳からはうっとり陶酔したような光を放っている。

ルカルは歯を食い縛り、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。

(だめだ……早く、逃げ出さないと……!)

自分もそんな風に変えられてしまう。

そんな危機感が彼の中で渦巻いていた。

その反抗的な心の動きを、ハクは正確に把握しているようだった。文字通り、自分が通って来た道だからだろう。

「ふふっ♡ それだけ元気なら、今日の調教も楽しいことになりそうですね……『大人しく、付いてきなさい』  
そうハクがルカルに命じると、ルカルの体は勝手に動き出した。

(ぐっ……こいつの命令でもこの状態になるのか……ッ)

体の自由が全く利かない。スーツで自慰を強制された時とは全く体の感覚が違った。

命令装置マリオネッターでの強制移動は、完全な強制で抗う余地もなかったのだ。

先に立って歩くハクの後姿はどう見ても無防備だったが、ルカルは全く動けない。

その後ろに大人しくついていくことしか出来なかった。

ハクがルカルを連れて入ったのは『調教室』と銘打たれた、ほど広い部屋だった。

部屋の中央に人が寝そべれるほどの大きな台があり、部屋の壁際には無数の機器類や道具が備え付けられている。

『台の上にあがって、両手両足を大の字に開きなさい』

ハクが重ねて命令すると、ルカルは素直にその上にあがらざるを得ない。

そして言われるがままに、両手両足を広げて大の字になってしまった。

「『これから何があっても、手足は絶対にその体勢から動かしてはいけません』」

そのハクの言葉と同時に、ルカルの体は完全に動かなくなってしまう。

どれほどルカルが動かそうとしても、ピクリとも動かなかった。

「ぐっ……何を、する気だ……っ」

ルカルはようやく口が利けるようになったので、そうハクに向けて尋ねる。

ハクは当然のことを聞いてくれるなど言わんばかりに、言葉を返す。

「もちろん、あなたを調教するんですよ……っ」と

そう言いながら、台のボタンを押し込むハク。

何かが起動する音がしたのと同時に、ルカルの寝かされている台の側面から、マジックハンドがいくつも飛び出して来た。

マジックハンドはいずれも人間の成人男性と同じくらいの手の大きさで、そのごつさも男性のものと同じだった。

マジックハンドは暫く蠢いていたが、台の上で礫状態になっているルカルに向かい、一斉に殺到した。

「わひゃっ!!」

思わず声が出てしまい、ルカルは自分で自分の声に驚く。

マジックハンドたちはそれぞれ狙いすました場所をくすぐり始める。

脇の下をくすぐるものもあれば、脇腹をくすぐるものもあり、鎖骨や足の裏などを狙うマジックハンドもあった。

「わひゃ、ひゃはっ、んいっ、ヒィッ」



それはチューブ状の装置だった。先端にわずかな膨らみがあり、それはちょうどルカルの乳首と同じくらいの大きさで、太さは乳輪くらいのサイズだった。

そのチューブ状の装置は、ルカルのバニーガール型のスーツの内、乳房を覆っている部分を無理矢理ずり下げると、その剥き出しになった乳首にそのまま先端が被さった。

くすぐりでそれどころではないルカルに対し、ハクは丁寧に説明する。

「性器の……特に乳首の開発に関しては、あまり意識しすぎても開発を阻害するということが分かってきているんです。くすぐりで他に意識を移しながらの方が、敏感になりやすく、これからの調教が……聞いていますか？」

そうハクが呼びかける前で、ルカルはひたすら声を張り上げて笑っていた。

「アハハハハッ、アヒッッ、ヒハッ、アハハハハハッ！」

くすぐりに一度屈してしまってから、思うように笑いを止められなくなっていた。

動かせる範囲の体を必死に震わせて、ルカルは笑い続ける。

その間にも、チューブ状の機械による乳首の開発は進んでいた。

胸の膨らみを彩る胸の先端を、ひたすら吸いあげ、刺激し、さらに開発していく。

ルカルの頭の中はくすぐったいという気持ちで大半が閉められ、乳首の気持ち良さには反応する余裕がなかった。

そうしているうちに、ルカルの股間から愛液が滲み始める。

じわりじわりとそのシミは広がっていき、やがてルカルのお尻側にも垂れていくようになった。

徐々にルカルの覚える快感が高まっているのだ。

「あハハッ、ケホッ、アハハハッ、も、っ、やめっ、ハハハハハっ！」

涙目になって悶えるルカル。もちろん、そんな懇願にハクが耳を貸すことはない。

ひたすら笑わされ、イカされ続けるルカルは、呼吸困難になって意識を失うまで責められ続けた。



ルカルが意識を失っていたのは、ほんの数秒のことだった。

マジックハンドの動きが止まり、ようやくまともに呼吸が出来るようになったルカル。彼はうつろな目で虚空を眺めながら、ぜえぜえと息を荒げていた。

涎が口の端から垂れ、全身にじっとり汗を掻いている。

刺激され続けた乳首は固く勃起したまま戻らず、股間は汗とは違う液体で濡れている。

艶めかしいと言って差支えのない、あられもない姿であった。

そんな彼の姿をハクは満足げに眺めた後、台に自分も腰掛ける。

「『私の膝の上に座りなさい』」

その命令はマリオネット命令装置によって、強制的に実行された。

立ち上がったルカルは、ハクに指示されるがまま、台の縁に腰掛けたハクの膝の上に乗ってしまう。

同じ方向を向いているので、ルカルは背中にハクの大きな乳房の感触を覚えた。

両手は肘を頭の上まであげ、指先を自分の頭の後ろで組まされた。

両脇と胸を無防備に晒す体勢だ。

ハクは手にオイルのようなものを塗りながら、ルカルの露わになっていた胸に手を這わせる。

「ふ、くう……ッ！」

オイルに塗れて独特の感触がするハクの手が、ルカルの胸の膨らみを揉み始める。

「現段階での調教の成果を見せてもらいましょか」

オイルには肌触りをよくする効果だけではなく、媚薬が含まれていた。

そんなオイルに塗れた手で胸に触れられたルカルは、とても強烈な快感を覚え始めてしまう。ハクの手による、胸と乳首責めが始まった。

媚薬オイルによって滑りのよくなったハクの手による責めは、ルカルをあっという間に追い詰めていく。

「はう……っ、んっ、くうっ……ッ！」

ハクの手の中で、ルカルの乳房が大きく形を変えていた。

指の形に乳房が変形し、揉まれているだけに強烈な快感を生み出してくる。

胸を揉みしだき、ルカルに快感を与えつつ、ハクは考え込むように唸っていた。

「まだまだ、ナノマシンの浸透が足りてないようですね……」

独り言のようにぼつりと呟かれた言葉に、ハクは反応した。

「ぐ……っ、何を、言ってる……?」

「私たちの体はナノマシンによって作り変えられています。そのナノマシンはその後もずっと体に留まり続けているのですが……今も徐々に浸食を続けているんです」

装置による命令を受け入れざるを得ないのも、体内にナノマシンが残っているからだ。

「そしてそれがどこまであなたの体に浸透しているかは……胸の大きさを判断できるようになっているんですよ」  
ハクがそう指摘しながら、ルカルの胸を揉む。

「ふあっ……！ な、なんだって……っ！」

「さすがに理解出来たようですね。そう、胸が大きくなるというのは、それだけナノマシンが浸透した証……あなたは徐々に性奴隷として完成していくのです」

恐ろしい事実を、その先達であるハクから告げられた。

「女の子として、気持ちよくなればなるほど浸食は進みます。身体付きはより雌らしく、言葉遣いもいずれは私のように女の子のものとなり、心もロタール連邦から離れてアウライ帝国に忠誠を誓うようになります」

ハクはルカルの胸を揉みながら、くすくすと笑いを零した。

その悪魔的笑いと、告げられた事実<sup>に</sup>ルカルの顔が青ざめる。

「や、やめろ……ッ。そんなの、嫌だ……!」

「無理なんですよ。もう何もかも遅いんです。遅かれ早かれそうなるんですから……ほら、諦めて気持ちよくなりましょう?」

膝の上から降りようとしたルカルだったが、<sup>マリオネッター</sup>命令装置の効果で、ハクの膝の上に居続けなければならない。

足掻くルカルを蹴るように、ハクの胸を揉む手つきが激しさを増した。

胸の膨らみが激しく揉まれ、形を変えるごとに快感が弾ける。

さらにハクは人差し指と中指の間に乳首を挟み、強い刺激を生じさせた。

「ひぐっ……っ! ああっ、んあああっ!」

背中を仰け反らせて悲鳴を上げるルカル。ビリビリと電気を流されたような刺激が、胸の頂点から身体全体に走り、頭までを痺れさせる。

その際、ルカルは頭の中にじわじわと何かが染み込んでくるような異様な感触を覚えた。

「んいつ、なあっ、んあ、だ、あ？」

半ば白目を剥き、未知の感触に怯えるルカル。その耳元にハクが口を寄せた。

「ふふっ、何かが染み込んでくるみたいなきもちがありましたか？ それがナノマシンの浸食が進んでいる感じですよ」

それが味わえるのは本当に羨ましいですね、とハクは囁く。

すでにナノマシンが完全に定着し、浸食し切られた彼女にはもう味わえない感じだったからだ。

終わった彼女からしてみれば懐かしい感じであり、羨ましい感じになるわけだが、当然ルカルにとっては恐怖の感じである。

「ふ、ふあ、ふ、ふぎけっ——んひううっ！」

揉みしだくハクの手が、今度は親指と人差し指でルカルの乳首を摘まむ。

その上、強く前方に向けて引っ張ったことで、ルカルは先ほど以上の凄まじい快感を胸に覚えた。

さらにハクはそこから、引っ張って伸ばした乳首を丁寧にすり潰すように指先に力を込める。

「ふぎゃああっ！」

ルカルにその刺激は強すぎた。

ビクビクと体を跳ねさせて絶頂してしまふ。

胸に対する刺激だけで絶頂させられたことに、ルカルは信じられない思いだった。

それに加えてルカルが信じられなかったのは、乳房を弄られるのに合わせて、その股間が疼き始めていたからだ。つた。

明らかに股間が熱を持ち、痒みを感じている時のように、そこに手を這わせてしまいたくて仕方なくなる。

(……ッ！ 馬鹿な！ 私は男だ……っ！ ロータル連邦の、誇り高き軍人だ……！ こんな、場の空気に流されることなど……あつてはならない……ッ！)

固い意思を持ってそう念じるルカルだったが、その意思とは裏腹に股間は甘く疼き、快感を求めて腰をもじもじと動かしてしまふ。

触りたい、触って欲しい、弄りたい、弄って欲しい。

そんな思いが彼の心の中でムクムクと大きくなっていくことを、彼自身自覚していた。

ハクはそんなルカルの様子を見て、ニヤリと妖しく微笑む。

ルカルの気持ちを、把握しているのだ。

「ふふふ……まだ胸を弄っていたので……『股間はご自分で、好きに弄ってくださいね』」

マリオネット命令装置を起動し、ハクはそうルカルに命令する。

ルカルにはその様子こそ見えていなかったが、体が勝手に動き出したことで、装置を介して命令されたのだということはすぐにわかった。

「や、やめろおッ！ ウツ、あああ……！」

咄嗟に叫んだ言葉に意味などなく、ルカルの手は自分の股間に触れる。

片方の手の指で女性器を広げ、弄りやすくしてから、もう片方の手の中指と薬指を中へと挿し込んだ。その途端に、すでに滲み出していたらしい愛液がその挿し込まれた指に押し出されて外へと溢れ出す。膣内を指が前後する感覚に、ルカルはまだ慣れているとは言い難かった。傷口に指を入れて掻き回されるような、そんな異質な感覚に身を震わせて悶えてしまう。

「ふああっ！ んあっ、ああああっ！ ふ、くうう……！」

口から嬌声が溢れそうになったルカルは、必死に声をあげるのを堪えようとしていた。

いかに気持ちよく感じようとも、声を上げてしまうのは恥だとそう考えてのことだ。

歯を食い縛り、声が出そうになるのを必死に堪えていたルカルだが、ハクがその耳元に再度囁きかける。

「我慢しないでいいですよ？ 気持ちよくなったら声が出るのは自然なことですから……思う存分、声をあげてよがっていいんです」

甘い誘惑の声がルカルの耳に入り込んで来る。

ルカルはそれを跳ねのけようとしたが、勝手に動く彼の体はより気持ちよくなれるように動き続けていた。

「ふ、っ、くう……っ、ああっ、んう、あ……ッ」

「ほら、もっと気持ちよくなりたいでしょう？ 『自分が一番気持ちいいと感じるように弄りなさい』」

ハクが具体的な命令を下す。

ルカルの手が、それを受けて動き方を変え始めた。

「や、やめ……ッ、んうううッ！」

ただ挿入して前後に動いていただけのルカルの指が、グルグルとかき混ぜるように動きを変えた。さらに親指が動き出し、ルカルのクリトリスを内と外から挟み込むようにして刺激し始める。ぐりぐり、と強い力でクリトリスが押し潰され、ルカルは体を仰け反らせて悶えた。

「ふくう……っ！ ひああっ！」

そんなルカルの指の動きを見ていたハクは、感心したように頷く。

「ふむふむ……あなたはそうやってクリトリスを弄るのが好きなんですねぇ」

「ち、ちがうつ、貴様がつ、無理矢理……！」

必死に否定するルカルに、ハクは取り合わなかった。

「ちゃんと言葉にして、『どう弄ってどう感じるのか、言ってみてください』」

それが命令装置マリオネットを介した命令だと、ルカルは感覚でわかるようになっていた。

わかったところで、どうにもならないのだが。

「言うわけ——指を奥まで突っ込んで、クリトリスを親指で押し潰すのが、気持ちいい……ッ!？」

言うつもりはなかった言葉を引き出され、ルカルは目を見開く。

（ばっ、馬鹿な!？ 装置での命令で、強制的に喋らせることは出来ないはず……!）

そうでなければ、調教施設なんていうもの自体が不要になるはずだからだ。

ルカルはそう考えていた。なのに、無理矢理喋る気のないことを喋らされてしまった。

ルカルの動揺はハクに筒抜けなのか、くすくすとその耳元で煽るように笑っている。

「ふふ……命令装置マリオネッターで喋らせることは出来ない……とでも思っていたんですね？ それは正解でもありませんし、不正解でもありません」

出来ないのではなく、『まだ』させられないだけなのだ、ハクは残酷な事実を告げた。

「ナノマシンの浸食が進むにつれ、徐々にアウライ帝国の忠実なしもべとなっていき、いまはまだ抵抗があることも自然とさせられるようになるんです。だから例えば――」

ハクがルカルの耳元に口を寄せ、囁く。

「『あなたの知る全ての軍事機密を話しなさい』」

「……！ ツ、く、あ……ッ！」

その命令に、ルカルは何も言わずに堪えた。それだけは絶対に話してはいけないことだったからだ。

喋ったが最後、多くのロタール連邦の重要拠点に致命的な損害を与えてしまいかねない機密を、ルカルはいくつも抱えていた。

そんな機密を喋らずに済んだことに安堵したルカル。

聞き出すことに失敗したはずのハクだったが、どこか嬉しそうな気配を滲ませていた。

「ふふふ……いまのでよくわかったでしょう？ 本人が本当の意味で話したくないことは、命令装置マリオネッターを用いてもすぐには聞き出せないんです。でも、逆に捉えると、どうでしょう？」

「ぎゃ、逆……に……？」

困惑するルカルに対し、ハクはより楽しそうな様子で続けた。

「つまり、あなたが命令で口にしてしまうことは——本当は、あなた自身が口にしたくなっているということですよ」

ハクの指先がルカルの乳首を押し潰して刺激を与えると、ルカルは体を跳ねさせて反応してしまう。

「ほら、こんな風に刺激されて、気持ちいいでしょう？ 『素直に答えなさい』」

「き、気持ち、よく、な——気持ちいい、です……なあっ!？」

「ほらほら、どんな風に弄られたいですか？」

「い、じらな——もっと乳首を捏ねまわして、引っ張って欲しいです……んぐうっ!」

言うつもりのない言葉がすると口から出てしまい、ルカルは赤面する。

ハクは言われた通りにルカルの乳首を指先で押し潰し、捏ねまわし、引っ張って刺激を与える。

「はひうっ、ああああっ! ひああっ!」

自分の思った通りの刺激を与えられ、ルカルは激しく悶えた。

「手が止まっていますよ。弄りながら、どう弄っているのかを事細かに報告しなさい」

そう促すハクの言葉に従って、ルカルは自分の性器を弄る動きを再開する。

「ふくう……! 指を性器に入れて、ヒダを感じながら、掻き回していますっ。親指で膨らんだクリトリスを押し潰

しながら、指の腹で擦るのが気持ちいい、です……っ」

先ほど喋らされた時よりも具体的に、より詳細にどう弄って感じているかを話してしまうルカル。

それはナノマシンの浸食が刻一刻進んでいることを示していた。

(まずいまずいまずい……！　これ以上は、まずい……！)  
ぐちゅぐちゅ、と弄っている性器から音が鳴り響く。

「滲み出した愛液を指でぐちゅぐちゅ掻き混ぜるの、気持ちいいです……ッ」

(ううう！　やめろ……！　口にするな……っ。閉じろ、閉じろお……！)

身体はハクの命令に従って動いてしまっていたが、ルカルの心は絶叫していた。

いままでは表に抵抗を表すことが出来ていたが、それが出来なくなっていた。

せいぜいが顔を歪め、不本意であることを示すことが精一杯で、口を閉じることも、黙り込むことも出来ない。

そんなルカルの複雑な状態を、ハクは愛おし気に眺めていた。

「いいんですよ、そんなに我慢しなくても……ほら、気持ちよくイっつてしまいましょう？」

ただでさえギリギリの状態で堪えていたライラに、その甘い言葉は毒過ぎた。

「ふあ、ああああああっ……！　人差し指と親指で、クリトリスを挟んで、扱いて、いきます……っ！　ッ——  
ふぎ、ひああいいっ！」

本人の申告通り、ルカルは自分のクリトリスを指で挟み、扱き上げながら、絶頂した。

ルカルの腰が浮き、情けない体勢で腰を突き出しながらブルブルと震える。

やがて力尽きたようにぐったりするルカルの頭を、ハクは優しく撫でてあげた。

「よくできました。さらに素直になれたところで……もう少し虐めてあげましょう」

ハクはそう言うと、ルカルの体を百八十度、縦に回転させた。

ハクの膝の上で、逆さまにひっくり返された形だ。

開いた足を抱え込まれ、ハクの胸とルカルのお尻が合わさっている。ハクの足の間にルカルの頭が挟まれているような形で、かなり恥ずかしい体勢だった。

目の前で広げられたルカルの股間に対し、ハクは口を付けてクンニを始める。

「ひああっ!？」

「私がおマンコのお世話をしますので、おっぱいは自分で弄りなさい」

もちろん一番気持ちよくなれるやり方です、と付け加えるのも忘れない。

ルカルはひっくり返され、不自由な体勢ながら、その胸を自分で弄り始めた。

「ふあっ、おっぱいは、全体を揉むのが……好きです……ッ、それで、乳首が立ってきたら……おちんちんを扱くみたいに、指で丸を作って……乳輪ごと扱き、ますっ」

(ああああ! 違う違う違う! そんなこと、考えてないっ!)

内心絶叫するルカルだったが、体の方は止まらない。

本人が言う通りに、まずは乳房全体を両手で餅を捏ねる時のように捏ねまわし、しっかりと乳首を立たせた。

その上で、親指と人差し指で丸い円を作り、乳首の周りの乳輪も一緒に扱くように指を動かす。

胸を使ったオナニーはまだそう経験のないはずのルカルだったが、その短い経験の中でも、すでにどう触れば自分が一番気持ちよくなれるか、本能的に理解していたのだ。

そんなルカルのオナニーを眺めつつ、ハクはルカルの性器へのクンニを続ける。

長い舌が唾液と共にルカルの中へと入って来て、指とは全く違う快感をルカルに与えた。

ルカルは激しく体を波打たせ、逃れようとするが、ひっくり返った体勢から体を動かすことがどうしてもできなかった。

それは本当はルカルもハクにクンニをされたいと望んでいるということだと、ルカルの理性は理解してしまう。ナノマシンの浸食が進んでいるのだと、理解せざるを得なかった。

(嫌だ嫌だ嫌だ……！ イキたくないっ)

そう内心のルカルは叫ぶが、ルカルが表に出せるのは、真逆の思いだけだった。

本当は嫌なのか、本心は望んでいるのか、ルカルは頭の中がごちゃごちゃになってしまっていた。

「乳首を引っ張って、押し潰してっ、イキますっ、ああっ、ひゃああああっ！」

ルカルの体が、激しく絶頂して潮を噴く。

噴いた大量の潮は全てそこに口を付けていたハクが飲み干してしまった。

「んっ、んん……っ、ぷはあっ！ 中々、凄い量でしたよ……っ」

息を荒くしながら、ハクがそうルカルの潮噴きを挿入する。

それに羞恥心を煽られ、死にたくなるくらいの気持ちになりながら、度重なる絶頂に力尽きたルカルは意識を失った。

ルカルは意識を失う寸前、ひと際強いナノマシンの脳への浸食を感じたのだった。

## 第五話 女の快楽

気絶したルカルが目覚めたのは、独房のベッドの上だった。

慌てて起き上がろうとしたルカルだったが、頭に鈍痛を感じ、体を起こし切れなかった。

「っ、う……！」

ジクジクと膿むように痛む頭に手をやり、深く息を吐く。

(どれくらい……時間が経った……?)

独房に時計などという時間を示すものは置かれていない。

腹具合で確かめようにも、ただ空腹だということしかわからない。

しかしなんとなく、気を失った時からそれなりの時間が経っているような気はした。

(半日……いや、もっとか？ ダメだ、考えても仕方ないことを考えるな……)

ルカルは気合を入れ直して再び体を起こす。

ずしりと体に重みを感じた。

「ふう……え？」

ルカルは体を起こしたことで、自分の体に起きている異変に気付く。

明確だったのは、その胸の大きさだった。気を失う前はCカップくらいだった胸が、また一回り大きくなっていく。

いまのルカルの胸はDカップほどの大きさとなり、ルカルの手から余るほどになっていた。段々とバニーガール風の衣装が似合う体つきへと変わってしまっている。

「これは……とてもまずいわね……」

ぼつりと呟くルカル。

(確か胸の大きさはナノマシンの浸食の度合いを示しているとか言っていたし……このままじゃ、本当に……ん?)

そこまで考えてから、ルカルは違和感を覚えた。

自分以外の人間がいるのかと周囲を見渡してみたが、当然そこは独房で彼以外の存在はいない。

(いまの声……なんだ? なんで、女の口調の声が聞こえた……?)

ルカルは不思議に思いながら口を開く。

「どうなってるの? ……えっ!?!」

口から出た言葉が信じられず、ルカルは自分の口を手で塞いだ。

どくん、どくんと心臓が激しく高鳴り、自分が動揺しているということに自覚する。

(いま、私は……『どうなってるんだ』と口にしたはずだ……!)

「ありえないわ……ッ、ひっ!」

再度呟いたことで、ルカルは自分が喋る時の言葉遣いが女のものに変わっていることを理解せざるを得なかった。

(なん、で……ッ、こんな……! 私はルカル・ヴァルトハイム……ロタール連邦の大佐だ……!)

自分の本名と所属を暗唱することで自分を落ち着かせようとする。

「私は……っ、くっ、うう……ッ」

だが、改めてそれを口にしようとする——名前すら、口に出せなかった。

「ど、どうなってるの……っ!？」

自身の状態の意味がわからず、ルカルの瞳が不安に揺れる。

訳の分からない状況ではあったが、それでも自分の目が潤むということにもルカルは動揺していた。

(涙を浮かべるなど、軟弱な人間ではなかったはずだ……!　なのに……!)

混乱の極みが訪れようとしたとき、独房の扉が開いてハクが入って来た。

ルカルは思わず怯えた小動物のように体を固くしてしまった。それも本来のルカルからすればありえない反応だ。ますますルカルの頭が混乱する。

そんなルカルの不安定な状態に構わず、ハクは淡々と口を開く。

「おはようございます。昨日は激しい調教でしたからね。今日は特別に休暇が与えられました。良かったですね」  
微塵もそうは思っていないだろうハクの言葉に、ルカルは歯噛みする。

「ぐっ……ね、ねえ、貴女。この口調は、どうなってるの？」

ルカルは「おい、貴様」と呼びかけたつもりだったが、自然と女らしい言葉に矯正されたものが彼の口から零れ出る。

(く、くそお……!　女言葉など、使いたくないのに……!)

屈辱的なものを感じつつも、ルカルにはどうしようもなかった。

それを受け、ハクは小首を傾げる。

「この口調、とは何のことですか？ とても体に合った言葉遣いだと思いますよ」

「と、とぼけないで！ 貴女が何かしたんでしよう!？」

そうルカルは確信を持って怒鳴ったが、少女の震えた声で女の言葉遣いでは圧も何も与えられない。

ハクはそんなルカルの怒気を——まるで妹が癩癩を起こした時の姉のように——余裕のある笑みで受け流す。

「私は何もしていませんよ。言ったでしょう？ ナノマシンは徐々に浸食を進める、と。それによってあなたは振る舞いが女性らしくなり、そしてアウライ帝国に忠誠を誓うようになっていくのです」

「そんな……!」

「加えて、本当に望まないことはさせられない、という話もしましたよね。つまり……徐々にあなたは、女性であることを受け入れつつあるということですよ」

そのハクの指摘に、ルカルは目を見開いた。

（わ、私が……？ 女性であることを、受け入れつつある……だと……？）

それは彼にとって認められない事実だった。

「そんなこと、ないわ……!」

「いくら言葉で否定しても、体は正直ですから。いずれあなたも理解できますよ」  
ルカルの否定はあっさりハクに受け流される。

その証拠に、とハクは告げる。

「女になることばかり気にしておられるようですが、脱獄はしなくてよろしいんですか？」

ハクの突き付けた言葉は、ルカルの心を容赦なく抉った。

確かに、脱獄しようという考えが全く思い浮かばなかったことに気付いたのだ。

本来であれば、目が覚めてすぐにまずはそれを考えなければならなかったはずなのに。

(……ッ！ いや！ いまは、自分の状態を把握するのが大事だったただけだ……！ 断じて、脱獄を諦めたわけは……！)

心の中でそう強く念じるルカル。

ハクはそんな彼の胸中を見抜いているのか、生暖かい目でルカルを見つめていた。

「まあ、何度も言いますが、早めに認めた方が楽ですよ、とだけ言っておきますね。休暇なのは確かなので、おひとりでごゆっくりお考えください」

「……それを伝えるためだけに、わざわざ来たの？ 随分と暇な時間があるようで、羨ましい限りだわ」

せめて少しでも嫌味を言おうとしたルカルだったが、それも全て女の言葉遣いになってしまふ。

余計にそのことを意識することになってしまい、嫌味を言えば言うだけ自分が追い詰められる結果になった。

ハクの方は、特にルカルの嫌味を気にする様子もなく、手に抱えていた荷物をベッドの上に置く。

「これでも忙しいんですよ。昨日のようにあなたに構ってあげられるほど暇じゃなくて。だからこれを持ってきてたんです」

そうやってハクがベッドの上に置いたのは、ローションやデイルドなど、大人が自慰を行う時に用いるグッズの類だった。

ルカルも一端の成年済みの男性として、その知識がないわけではない。実際に用いたことはなくとも、知識として知ってはいた。

だが、いまの状況では、彼の目にそれらのグッズは目の毒だった。

「暇を持て余したら使ってもいいですよ」

「っ、使わないっ！ 持って帰って！」

咄嗟にルカルはそう言ったが、ハクがそれに従うわけもなく、ベッドの上に大量のグッズを広げて去って行ってしまった。

「あ、ちなみに道具を使った初めてのオナニーにはデイルドがお勧めですよ。体の奥までずしんと来る感覚は癖になりますから」

去り際にそんな余計なアドバイスを置いていった。

ルカルは歯を食い縛り、なるべくそれらのグッズを見ないように、背を向けてベッドに腰掛ける。

（脱獄……そう、脱獄をしなきゃ……！ なんとしてでも、早めに、だ……！）

頭の中で必死に脱獄の算段を付け始めるルカル。

だがその思考は散漫で、仮に脱出出来てもどうしようもならないだろうという思いが強かった。

いまのルカルの身体では、脱出出来たところでどうすることもできない。情報を持ち帰れば、という気持ちも

なくはなかったが、どう証明するかも難しい。

そもそもこんな人間の体を作り変えるということ自体、それまでは荒唐無稽なことだと思っていたのだ。実際に自分がそうされているから信じるしかない状況にルカルはなっているが、安全地帯で過ごしているロタール連邦の重鎮たちが信じるとは思えない。

（最悪、質の悪いアウライ帝国の間諜と断じられ、処刑されて終わりか……）

そんな未来が分かり切っているのに、脱獄する必要があるのか。

ルカルは自分で考えながら、帰らない理由を導き出していることに気付いていなかった。

もつというのであれば、当初のルカルであれば脱出も救出も絶望的と思えば、ロタール連邦のために何が何でも自決することを選んでいただろう。

彼の忠誠は、連邦に命を捧げるレベルで確かなものだったのだから。

だが彼は自決の選択肢を思い付きすらしなかった。

それはその自決すら厭わないルカルの連邦への忠誠心が、徐々に違う方向に傾いていることを示していた。

だがそれをルカル本人は認識できない。

それくらい自然に、徐々に、ルカルの心は浸食されていたのだ。

必死に脱獄の意思を維持しようとしていたルカルだったが、ふとその体が奇妙に疼き始めたのを感じた。

（なん、だ……？ 胸と、あ、あそこが……熱い……？）

ルカルは集中するため、極力体を動かしていないはずだった。

だが完全に動きを止めるのは修行者でも難しい。自然と足を組み替えたり、手で頭を掻いたり、体は動いていた。

それ自体はわずかな動きだったにも関わらず、その結果身体全体が動き、服に体が擦れてしまっていた。

(ぐっ……くそっ、こんな、程度の刺激で……っ)

一度意識し始めると、どうしても気になってしまう。

ルカルは足を組み替える拍子に、股間に布地が擦れて弱い疼きが生じるのを感じた。

昨日散々弄り弄られた乳首も、少し体を振るだけでピリピリとした僅かな快感を生じさせる。

「く、う………！ あ……ッ」

なるべく口を開かないように堪えていたルカルだったが、少し体が動くだけで強い快感が生じて声が出てしまう。

その感じて僅かに出てしまう声すらも、どこか女らしい呻き方に変わっているような気がした。

(くそ……ッ、全然、落ち着かない……！)

じっとしていれば刺激は生じないのかもしれないが、この場合「じっとしておく」ことがルカルにはとても難しかった。

昨日の一件でかなり開発された彼の性感帯は、じっとしていてだけで十分な快感を生み出すようになってしまっていたのだ。

「あ……ッ、だめえっ………！」

疼く感覚が限界に達したルカルは、咄嗟に自分の股間を両手で抑えた。それはいわゆる、おしっこを我慢する時

の仕草に近いものだった。

力強く抑えつけられれば多少はマシになるかと思っただけだったが、結果としてはかえって疼きが増す結果となった。

手で抑えた股間からぐちゅっといういやらしい水音が響き、快感の疼きをさらに強める。

「ふ……フーッ……っ！ フーッ……！」

それでも指を動かさなかったのは、ルカルの鉄の意思があつたことだった。

もし普通の人間が同じ状況に陥っていたとしたら、一も二もなく即座に指を動かして自分の股間を弄っていたことだろう。

それをしないだけでも、ルカルの精神力は驚嘆の域に達していた。

だがそれはあくまで堪えることが出来るというだけで、何も感じていないわけではない。

むしろその刺激によつて疼きはより高まり、彼の意識はその快感の疼きだけに絞られる。

（まずい、まずいまずいまずい……！ このままじゃ、我慢できなくなる……っ！）

股間を抑えてプルプルと体を震わせる様は、失禁を我慢しているようであり、非常に滑稽な姿だった。

もちろん本人に自分が滑稽だと思うような余裕はなく、目を見開いて一点を凝視し、荒い呼吸を繰り返して堪えることしか出来ない。

（丸一日休暇なんて、罨だと言っているようなものだ……！）

体の疼きが我慢できなくなつて、自分から自慰を始めてしまえと言っているに等しい。

そうやって徐々に自分の意思を削り取っていくつもりなのだろうと彼は悟っていた。だからこそ、その思惑に乗るわけにはいかない。

ルカルはじつと堪え続けた。それはあるいは焼けて熱された石の上に腰掛け続けるような、針の筵に寝続けるような、そんな凄まじい精神力がいる行為だった。

彼の意思は固く、例え少女の姿になろうとも、そう易々とは陥落しない。

そうやってただひたすらに耐えること数時間。

ルカルは限界を超えて、まだ耐えていた。

「ハーっ……ハーっ……ハーっ……ハーっ」

口から荒い呼吸を繰り返している。突き出した舌からはボタボタと涎が垂れ落ち、全身に脂汗のようなものをかいている。

手で抑え続けている股間からは、何もしていないのにベッドのシーツにシミを作るほどに愛液が溢れていた。

顔は真っ赤に染まり、目は虚ろで、火照った全身から湯気が立ち上っている。

それでも指を使って弄り始めていないのだから、彼の精神力は驚嘆の一言だ。

動きを止めたまま、一日が過ぎるかとも思われたが、そうはならなかった。

バニースーツの機能が動き出し、ルカルの体を強制的に動かし始めたからだ。

耐えていたルカルにしてみれば、絶望的な話だっただろう。しかし彼はむしろその時間が来たことを喜んでいた。

(スーツに無理矢理動かされたなら、仕方ない……！ 弄ってしまうのは、仕方ないことなんだ……！)

自分の意思で弄っているわけではないという事実があればいい、とルカルは考えてしまっていた。それが自動的であれ自発的なものであれ、弄るといふ事実は何の変わりもないのだが——そんなことを考えている余裕はルカルにはなかった。

ルカルの体がベッドの上でM字開脚の姿勢を取り、片手が胸に、もう片方の手が股間へと動く。

「はあ……はあ……はあ……！　ンアあッ！」

手が乳房を掴んだ瞬間、ルカルは軽く絶頂したような気がした。

実際は単に快感の刺激が走っただけなのだが、絶頂と勘違いするくらいに強烈な感覚になっていた。

喜びに震えるルカル。その股間を弄ろうとしていた手が、強い力で彼の股間を鷲掴みにする。

思っていたのとは違う刺激だったが、待ち焦がれていた刺激には違いない。

「ふぐう……ッ！」

（あ、ああ……やばい……っ、もう、少しで……ッ）

絶頂がすぐ手前までやって来ていた。あと何か一つ刺激が加わるだけで、あっさりと絶頂してしまうところまで一息に上り詰める。

いよいよ絶頂に達することが出来る——そうルカルが期待したのは無理もない。

だが、スーツの動きは急にぴたりと止まってしまった。

絶頂寸前まで昂っていたルカルの気持ちは、中途半端なところで放置されてしまう。

（く、あ……っ！　ま、またか……！）

初日、寸止めさせられ続けたことを思いだす。あの時もあともう少しで行けるといところで、スーツの動きが唐突に止まってしまっていた。

(く……っ！ 動かしちゃ、ダメだ……ダメだけど……！)

寸止めの苦しきはその時にすでに十分味わっていた。

いまは体の開発が進んだこともあり、とてもその苦しみに耐えられる気がしない。

だからルカルは耐えるのではなく、違う方向に考え直す。

(少しでも指を動かせば、あとは全部やってくれるはず……！)

その時の経験を踏まえ、ルカルはそう考えてしまった。

それはとても巧妙に仕掛けられた罠であることを、ルカルは見抜けなかった。

少しでも動かせばあとは勝手に体が動く。

そう判断したルカルは、自ら指を動かしてしまった。

ぐちゅり、と指がルカルの性器に潜り込み、ビリビリと強い快感を生み出す。

「ふあっ、ああっ……！ ……あっ……あ、れ？」

自らの意思で股間を弄ったにも関わらず、バニースーツは動き出さなかった。

その事実、ルカルの心は一気に絶望に染まる。

「う、うそっ……そんな……っ、なんでえ……っ！？」

女口調を使わないように、なるべく口を開かないようにしていたことも忘れ、呆然と呟く。

恐る恐る指先を再度動かしても、パニースーツは沈黙したまま、彼が望んだように無理矢理体を動かして自慰し  
てはくれなかった。

そのことを知ったルカルは、完全に嵌められたことを知った。

(しまった……っ、初日に寸止めで追い詰めて来たのは……このため、か……っ！ まずい……！)  
ぶるぶる、とルカルの手が震える。

それでもなんとか堪えようとした。程なくして興奮が落ち着いて来る。

そのことにルカルがほっとした瞬間、再び彼の体は勝手に動いて自慰を始めてしまう。

「ひうっ、あああっ、やだっ、やめて……ッ」

胸を揉み、股間を弄り、興奮を高めていく。

そして再び絶頂寸前でぴたりと指が止まった。

「ふぐう……ッ！ もう、いやああ……ッ！」

それでもすぐに陥落しなかったのは、ルカルの意思の強さが反映された結果だと言えるだろう。

いずれにせよ、限界が訪れるまでその寸止め地獄は続けられるのだから、結果としては同じことではあるのだが。  
寸止めを繰り返されたルカルの意識は朦朧とし、いまにも意識を失いそうなほど追い詰められていた。

動かさないように堪える時間と、無理矢理動かされて股間を弄る時間。

それが相乗効果を生み出し、指を動かしたいという気持ちが高まっていた。

「あ、ああ……ッ、ダメ……ッ、ダメなのに……ッ！」

そして、とうとう。

情けない声をあげながら、ルカルは自分の意思で指を動かす、自分の性器を弄り始めてしまった。そして一度弄り出してしまえば、もはや止まれない。

少しでも気持ちよくなるべく、指を激しく動かしてしまおう。

「ハッ、ああっ、んっ、ひあっ……っ、ああっ！」

声を抑えようという意思も維持できなくなり、激しく声を張り上げる。

殺風景な独房の中で、その喘ぎ声はよく響いた。ルカル自身があげている声がそれなのだ、彼自身にそれを自覚させる一助になっている。

「ハヒッ、ひあ……ッ、んッ、くう……あっ……！」

ルカルはベッドの上で俯せになり、膝を立てて腰を浮かせていた。

その状態で股間に両手を這わせ、性器を弄りつつ、腰を前後に動かして、ベッドにその豊満な乳房を擦りつける。それがとても気持ちのいい自慰の方法だと、ルカルの体は自然とその形に落ち着いていた。

「ふぐっ、ううううっ……！ ああああッ！」

びくんびくん、と激しく腰を痙攣させ、絶頂する。

待ち焦がれていた絶頂は非常に気持ちのいいものだったが、それでも彼の体の疼きは治まりを見せなかった。

(もっ……もっ……もっ……もっ……気持ちよく、なるには……っ)

激しく指を動かしながらも、ルカルは自分の指が奥まで入らないことに不満を抱きつつあった。

もつと体の奥に触れることが出来れば、もつと気持ちよくなれるはずだ、と。女の体が無性に深いところへの挿入を求めていた。

ベッドの上に放置された大人の玩具の類が、そんな彼の目に飛び込んで来る。

その中には、男性器を模したと思われる長く太い dildo が混じっていた。

「んっ……ッ、これを使えば……はっ……んッ、もつと気持ちよくなれるわよね……ッ」

自慰を続けながら、ぼつりと呟くルカル。

そんな彼の求めに応じるように、dildo がこれ見よがしにころりと転がった。

咄嗟に、ルカルはその dildo を鷲掴みにしてしまう。

それは彼の想像よりもしつかりとした材質で出来ており、そして見た目より掴んだ時はより太く感じた。

「こんなの、入るの……？」

ルカルは自分の指とその dildo の太さを見比べる。dildo はいまのルカルの指三本、下手すれば四本を合わせたような太さをしている。

現在ルカルの膣には彼自身の指が、中指と薬指の二本が入っている。

それだけでも穴は相当狭く、一本ずつ押し込まなければ入らなかったほどだった。

そこにこの四本分の dildo が入るなど、とてもではないが信じられない。

入るの、だろうか。

「……ッ！ わ、私、何を考えてるの……！」

思考してしまつてからルカルは思い直して首を横に振つた。

これ以上、アウライ帝国の者たちの思い通りになるわけにはいかない。

(決して私は……思い通りにはならない……っ)

そう硬く決意を固める。だがその決意は全く意味のないものでしかなかつた。

なにせそう考えてデイルドから離れた手に対し、反対側の手ははまだ自分の股を弄り、穴を抉るように指を動かして続けているのだから。

自分自身すら騙せないほど、彼の行動は支離滅裂だつた。

(くああああ……ッ！ 違う、違うッ、私は、誇り高き連邦の一員として……ッ、敵の思惑にハマつて、気持ちよくなりたいと感じているなんて……ッ)

そんなことはない、と否定したい彼の思いは、自分自身の手が止まらないことで否定されている。

どうしてこんなに苦しまなければならないのか、もういいのではないか、そんな思いが彼の心の中で成長してく。

(ぐ、ぐ、くう……ッ！)

一度はデイルドから離れた手が、再びそのデイルドへと伸びていく。葛藤が目に見えてわかるほど、その手は震えていた。

一方の手は、相変わらず激しく性器を弄り続けていたが、指では満足できないようになりつつあつた。

弄る手つきは洗練されていていたのだが、純粹にもっと強い刺激を、もっと奥で味わいたいという欲求が強ま

つっていたのだ。

身体の最奥を抉り、快感に打ち震えたいという欲望が、ルカルの心を支配しつつあった。

震える彼の手が、デイルドを掴む。

改めてそのデイルドの固さ、長さ、太さを手で感じた瞬間——ルカルの最後の堰は決壊していた。

それをあそこに突き入れたらどれくらい気持ちよくなれるのか。

気持ちよくなりたいという気持ちが彼の抗う意思を押し流し、デイルドを掴んだ手を股間へと動かす。

「はあ……ッ、はあ……ッ、はあ……ッ」

激しい呼吸を繰り返しながら、ルカルはそのデイルドの先端を、バニースーツの股間部分へと宛がった。

すると、デイルドを感知したバニースーツの股間部分は自然と大きく穴を開け、デイルドが挿入しやすくなるような状態になった。

愛液でドロドロになったルカルの性器が露出し、溢れた愛液が垂れ落ちる。

本来デイルドには挿入の際に使うためのローションがセットでついているのだが、この時のルカルはそんなローションの存在など一切考慮に入れていなかった。

「ふッ——くううううッ！」

デイルドの先端を性器に合わせ、そして、躊躇わずにそれを押し込んでいく。

彼が取っている体勢は相変わらず俯せで腰を突き出したままだったため、後ろから挿入されているような、奇妙な感覚をルカルは最初の挿入で味わうことになった。

ずぶずぶ、と激しい抵抗がありながらも、ルカルの性器に太いデイルドが挿し込まれていく。

「あぎっ、ふぐぎゅううっ！」

体の中をデイルドが押し広げながら進んでいく。ルカルはヒダの一つ一つがそのデイルドの形を認識しているように感じた。

自分の体の中に、指以外の何かが入り込んで来る。その衝撃は、彼の想像を遥かに超えていた。

頭の中で火花が飛び散るように快感が弾け、デイルドを奥まで挿し込むまでの間にルカルは体を何度も跳ねさせて絶頂していた。

「すごっ、これしゅごっ、あっ、おきゅっ、おきゅにあたりゅっ」

あまりにも強すぎた衝撃は、彼の発声機能にも障害を与えた。まともに舌が回らず、舌足らずの子供のような声をあげてしまう。

元の男として考えれば、その場で自決したくなるような状態だったが、いまのルカルはそんなことを気にしている余裕はない。

デイルドが奥まで到達したということは――次は引き抜くターンだ。

挿入するだけで気が狂いそうになっていたルカルは、引き抜こうとすることでどんな快感が味わえるのか、そのことしか考えられなくなっていた。

デイルドを掴んで膣に押し込んでいた手を、今度は抜く方向に力を込める。

その時生じた感覚は、ルカルにとってあまりに馴染みのない、恐ろしいまでに気持ちいいことに特化した感触だ

った。

ディルドの側面と膣壁とが擦れ合い、激しい快感を生み出す。

彼の膣ヒダのひとつひとつが、通っていく際に押し広げられたのと同様、抜けだそうとするディルドをしつかりと啜え込んでいることがわかった。

ヒダが一つずつディルドにまとわりつき、ぷちゅぷちゅと音を立てながら離れていく。

普通の女性でも中々感じ取れないような細かなところまで、いまのルカルは感じ取れていた。

そしてそれは、普通よりも遥かに強烈な快感を生み出すことに繋がり、ディルドが膣内を一回往復するだけで、ルカルは何十回という絶頂を感じていた。

「は……ッ、はあッ……ッ、ああ……ッ！」

もっと気持ちよくなりたい。

ディルドを膣に入れ、奥まで弄ることは浅ましいことだと頭ではわかっていたが、意思の力で止められるような状態をとくにルカルの身体は過ぎていた。

激しくディルドを出し入れし、膣内をそれで抉るように刺激する。

普通の人間にすれば拷問にも等しいくらいの激しいピストン運動だったが、いまのルカルには非常に激しい快感にしか感じられなかった。

「ひあッ、ああッ、んあッ、あんッ！ んあああッ！」

激しく叫び、仰け反り、それでも手の動きは止まらない。

結合部から溢れた愛液はすさまじい量で、彼の足を濡らし、膝まで垂れるほどになっていた。

押し込む度にぷしゅつ、と愛液が噴出し、ルカルの周りを汚していく。

部屋の中には発情した女の匂いが充満し、甲高い喘ぎ声が幾重にも反響して五月蠅く響き渡る。

そしてとうとう、ルカルはもっとも深い位置までディルドを勢いよく押し込み——最も激しい絶頂を迎えた。

「ふあっ、あああああっ！——ひあああっ！？」



そして同時に、体内の奥深くで熱い何かが進るのを感じた。

それはデイルドに仕込まれていた仕掛けだった。そのデイルドには、一定以上の絶頂を感知すると、先端から精液を噴出する機能が付いていたのだ。

意図せず、ルカルは中出しによる絶頂の感覚を味わうことになってしまったのだ。

それと同時に、ルカルは常に薄く感じていた飢餓感のようなものが薄れていくのを感じた。

その穏やかな満たされ方は、空腹時にご飯を食べる時の感覚にとてもよく似ていた。

(なん、で……この、タイミング……で……?)

絶頂と中出しされた余韻に浸っていたルカルは、そう不思議に感じた。

実はナノマシンによって作り変えられた彼の身体は、通常の食事を必要としなくなる代わりに、精液から栄養を取らなければいけない体になっていた。

その事実をルカルは聞かされていないが、精液が腔内で噴き出したことによって、体が満たされた状態になったというわけだ。

そのことにルカルは気付かない。絶頂したことで満たされたのだろうと感じていた。

ルカルはその後自分の性器をおもちゃを用いて弄り尽くし——ナノマシンの浸食を自らさらに大きく進めてしまっていた。

## 第六話 濃厚レズセックス

目が覚める度に大きくなる自分の胸に、ルカルはいい加減驚かなくなっていた。

現在ルカルの胸の大きさはDを超え、Eカップほどの巨乳に成長している。着せられたバニーガールの衣装はそれに合わせて大きさを変えていたが、ミチミチと内側から圧がかかっている感触を生み出していた。

そこまで乳房が大きくなると、彼の視界をかなり遮るようになり、さすがに無視することが出来なくなっていた。胸が大きくなるということはナノマシンの浸食がさらに進んだということであり、ルカルにとって歓迎できることではない。

だがその抗う気持ちがどんどん薄れていることも、ルカルは自覚していた。

(これ以上大きくなったら邪魔よねえ……っ、いや、そうじゃないだろう！)

「く……っ、これは、まずいわ……っ」

ルカルは頭を抱えた。

結局、力尽き意識を失うまで、自慰をすることをやめられなかった。

結果が、Eカップに成長したおっぱいと、頭の中まで浸食してくるようになった女口調だ。

そして何より、アウライ帝国に対して抗う気持ちがどんどん薄れていることが致命的だった。

もうこのまま流されてしまってもいいのでは、という考えが頻繁に訪れる。

それが来るたびにルカルはなんとかそれを打ち消していたが、流された方が楽なのでは、という気持ちは強まる

ことはあっても弱まることは全くなかった。

ベッドの上に置いたままだったディルドを手に取り、ベッドの端に追いやる。

(このディルドもいいけれど、もっと熱くて気持ちいいものを入れて欲しい……違うっ！ そんなものは入れたくない……！)

油断するとすぐに意識が犯されたいという方向に流されそうになっていた。

座っていても、立っていても、独房内で歩き回っても。

ルカルの思考に気持ちよく絶頂したいという欲求が常に割り込んで来る。

それに必死に抗っていたルカルだが、同時にそれに対する嫌悪感がどんどん薄れていることも感じていた。

アウライ帝国に忠誠を誓うことの何がいけないのか——そんな根本的なところが揺らいでしまっている。

なんとか抗い続けていたところに、ハクがやって来た。

「おはようございます。おや、入室を立てて迎えるとは……感心ですね。あなたは上官に対するそういう所作にも厳しかったのですものね」

開口一番放たれたハクの軽口に、たまたま立っていたただけだ、とルカルは言い返してやりたくなかったが、その体はまるで上官が現れた時のようにぴしりと背筋を伸ばして直立不動になっていたため、説得力がなかった。

それを認めることは、ハクを自分にとっての上官だと認めているということになる。

言葉を詰まらせて沈黙するルカルに対し、ハクは無造作に近づいて彼の大きくなった胸を鷲掴みにした。

「はうっ……！」

一日ぶりに感じる自分以外の意思を持った手の動きに、ルカルは想像以上の快感を覚えてしまった。腰砕けになりそうになるのを、意思の力でなんとか堪える。

「大きくなりましたねえ……昨日一日中、しっかり堪能したようですねによりです」

言いながら、ハクの手はルカルの乳房を揉んでいる。指が乳房の中に埋もれるほどに、ルカルの乳房は大きくなっていた。

「ふ……ッ、くう……っ」

ビクビク、と体を震わせるルカルは、揉まれることで生じる快感を味わっていた。

堪えるのでもなく、嫌がるのでもない。

ルカルはすっかり快樂の虜になっていて、自分以外の手が与えてくれる快感に身を委ねていた。

(だめ、なのにい……ッ！)

抗わなければならない、と頭では理解していても、とてもそれを実行できない。

すでにルカルの体は快樂に反応してそれを受け入れるようになっており、抗うという選択肢がほぼ意味を成していなかった。

胸を揉まれただけで素直に感じ始めたルカルの様子を、ハクは楽し気に見守っている。

「ふふ……すっかり従順になりましたね。今日の調教を始めましょうか」

そう告げたハクは、付いて来てくださいます、とルカルに告げて独房を出た。

ルカルはわずかにふらつきながらも、そのあとを付いていく。

途中、他の人間とすれ違いもしたが、ルカルはハクの後姿しか見えていなかった。

(どこに、いくのかしら……？ 調教室……じゃないみたいだけど……)

優秀だった彼は、初日に連れていかれた調教ルームにどう行くかを記憶していた。一度だけでも、道順をしっかりと記憶していたのだ。

だが調教ルームに向かっていないことはわかっていても、道順をしっかりと覚えようとしたそもその理由について、ルカルは全く意識出来ていなかった。

ただ従順に、言われるがままハクの後ろをついていく。

そうして辿り着いた先は、ハクの自室だった。

捕虜上がりとはいえ、すでに調教が完了した人物の部屋だからだろう。

独房よりは遥かに広く、物も私物めいたものがいくつか置かれていた。

階級が低い内は大部屋で雑魚寝しなければならぬところも多い中、狭くとも個室を与えられているという時点で、アウライ帝国の物質的豊かさを知れるというものだ。

そんな部屋についたハクは、ルカルを部屋に入れ、扉を閉める。

そして、部屋の机の上に置いてあった小瓶を手を取った。

「今日の調教はここで行います」

ルカルに向けて告げると同時に、ハクはその小瓶に入っている薬品を口に含む。

そして、ぼーっとハクを見つめていたルカルの口に唇を重ね、口の中の薬品を無理矢理流し込んできた。

「むぐっ……っ、んうっ……!!」

あるいは強引に振りほどくことは出来たかもしれない。

だがルカルは自然とその口づけを受け入れ、流し込まれる怪しげな液体を飲み込んでいた。

ルカル本人すら驚く素直な反応に、呑ませた方のハクは妖し気に微笑む。

「んっ……っ、む、あ……ッ」

ルカルと唇を重ねたまま、ハクはディープキスに移行した。

ハクの暖かくも生々しい舌が、ルカルの口内を蹂躪していく。ルカルはその舌の動きを、驚きながらも受け入れてしまっていた。

ぎゅう、と体を抱き締められ、大きな胸と胸が合わさって潰れ合う。

数分はそうやって口づけを交わしていただろうか。ルカルがすっかり出来上がる頃に、ハクは未練な唇を離れた。

「ふう……さて、と。今日の調教内容ですが……とてもシンプルです。痛くも苦しくもないので安心していいですよ」

そう言いつつ、ハクは自分のベッドの上に腰掛け、体を開いて見せる。

「私を気持ちよくさせてくれたなら、うんと気持ちのいいことをしてさしあげますよ」

簡単に優しいでしょう、とハクは笑みを浮かべて言う。

その笑みはどちらかといえば悪魔が人間を騙すときの笑顔だったのだが、ルカルはそのことに気付かなかった。なぜならハクが開いて示した、彼女の体に目が吸い寄せられていたからだ。

(気持ちよくしたら……気持ちいいことをしてもらえる……?)

それは彼にとつてとても甘美な誘い文句だった。

ルカルの脳内には、ハクに胸を掴まれた時の感触と、先ほど行われたディープキスの快感の記憶だけが巡っていた。

「わか、りました……」

ふらつきながらも、ルカルはハクの傍に跪き、その手をハクの股間へと伸ばす。

なにかがおかしい、ということにルカルは最後まで気付けなかった。

火照る体を感じつつ、ゆっくりとその手をハクの股間に触れさせる。スーツに覆われた彼女の股間は、それを通してもなお、熱くなっているのがよくわかった。

軽くルカルが指先で表面をなぞると、それだけでハクは身体全体を震わせる。

「ん……っ、いい、感じ、です……ッ、その調子……っ」

素直に気持ちよくなってくれていると感じたルカルは、ハクの股間をさらに弄り始める。親指でその股間を刺激し、クリトリスが勃起するように促す。

スーツ越しにもクリトリスが硬くなっていることはすぐわかった。

「ンッ！ はあっ……、も、っと……っ！」

ハクが艶やかに呻きながら、身を振って乳房を揺らす。

その目の前で揺れる乳房の動きにつられ、ルカルはその乳房に向けて手を伸ばしていた。

むにゅ、と形を変えるハクの乳房に埋もれるルカルの指。広げた指の間にハクの乳房が溢れ出すほどに、ハクのおっぱいは柔らかくそして暖かかった。

そのまま乳房を揉みしだくと、ハクはあつという間に息を荒げるほど感じるようになっていた。

彼女は今までこそ調教する側に回っているが、実際のところはルカルと同様にナノマシンによって体を変えられた存在だ。

当然、ちょっとした刺激でも気持ちよくなれるのは、ルカルとなら変わりはしない。

お世辞にもルカルの触り方は女性に慣れているとは言い難いものだったが、そんな拙い愛撫でも十分気持ちよくなっていた。

そんな反応のいい彼女の動きに煽られて、ルカルはさらにその体を愛撫し続けるのだが——ふと、妙な感覚が生じ始めた。

「んっ……あふっ。ん、う……？」

ルカルがハクの乳首を摘まんだ時、ルカルも乳首を摘ままれたような感覚を覚えたのだ。

ハクが自分の真似をして乳首を摘まんできたのかと思い、視線を自分の胸に落としてみたルカルだが、ハクは手を動かしてすらいなかった。

何もないはずなのに、摘ままれていた感触が生じている。

不思議に思いつつ、気のせいかと思ったルカルは、摘まんだハクの乳首を押しつぶすように指先に力を込めた。

そして自分の乳首も押し潰される衝撃を感じ、びくん、と体を大きく跳ねさせるのだった。

「んあっ!?! な、なに、いまの……ッ」

恐る恐る自分の乳首を触って、何かが付いていないかどうかを確かめるルカル。びりつとした快感が走ると同時に、今度はハクの方が身体を跳ねさせた。

「あは……っ、気付き、ましたか……? 先ほど飲ませた薬は、感覚を共有するための薬だったんです、よ……っ」  
ハクは悪戯が成功した童のような笑みを浮かべていた。

ルカルはそれを聞き、どういふことか理解した。

つまり、ルカルがハクの乳首を摘まんだことで生じた快感を自分も受け取り、自分の乳首が摘ままれたのかと勘違いしたということだった。

「私を気持ちよくさせればさせるほど……あなたも気持ちよくなれるってことです。頑張ってくださいね」  
挑発するように締めくくるハクに対し、ルカルは気持ちよくなるためならばなんだってしようという気持ちになつていた。

ベッドに腰掛けていたハクを押し倒し、仰向けに寝かせる。

押し掛かるようにして体を押さえつけたルカルは、そのまま股間への刺激を再開した。

無防備に広げられたハクの股間を、掌全体で揉むように刺激する。

ぐちゅぐちゅっ、とスーツの中で溢れた愛液が音を立てて暴れ、僅かな隙間から外へと滲み出した。

それをさらに引き延ばすようにして掌で股間を擦り、刺激をより強いものへとしていく。

「ふく、う……っ! さすが、ですね……っ、もう、こんなテクを……っ」

ハクにそう褒められたルカルには心外という気持ちもあったが、無言のまま刺激を続けた。

愛液が立てる音はさらに激しくなり、ハクが仰け反って快感を貪るようになる。

それは同時に、ルカルも感じることに出来る快感が強くなっていつているということでもあった。

ルカルは股間に感じる気持ちいい感覚を堪能しつつ、今度はハクの乳房に狙いを定める。

空いた手で揉むのではなく、顔を近づけ、そのスーツごと乳首を口に含んだ。

スーツの感触もしたものの、その薄いスーツを挟んだその向こうに乳首の感触も確かに感じた。

ビリビリとした甘い刺激が自分の胸にも流れたことで、ルカルは乳首を刺激することに成功していることを知る。

乳首への刺激を口でやろうとしている理由は、そうすることでもう片方の手が空くからだ。

股間と胸を同時に刺激しつつ、空いたもう片方の手でハクの体を隅々まで弄る。

太腿、脇腹、お腹、と性感帯になりそうなところを掌で摩り、刺激を与えていく。

その掌が、ハクの脇の下に触れた。

「ひゃんっ……っ」

その反応は劇的で、ハクがひと際激しく体を震わせる。

それと同時に、ルカルはそこから強い快感が走り抜けたのを感じた。

どういうわけだか、ハクは脇の下が弱いらしい。

(それなら……)

どうすれば一番気持ちよくすることが出来るのか、ルカルは真剣に考えて実行に移す。

股間を弄る手はそのまま、乳首を含んでいた口を離し、代わりに脇の下を摩っていた手で乳房を揉む。

そして——空いた脇の下に顔を寄せ、舌で舐め上げた。

「んあ、あああああっ！」

舐めの威力は凄まじく、ハクは激しく体を痙攣させて絶頂した。

それは同時にルカルの方にも同様の快感が襲い掛かるということであり、ルカルは初めて脇の下で気持ちよくなる、という感覚を体験することが出来た。

（本来は個人差があつて性感帯じゃないところも、この薬なら性感帯として味わえるってことよね……）

ドキドキと興奮で心臓が高鳴るのを感じるルカル。

もつと気持ちよくなれるかもしれない、と考えるだけ、ルカルはその事実を高揚してしまうようになっていた。

「くう……ッ！ やり、ましたね……ッ」

悔し気に声を詰まらせたハクが、彼女の方からも手を伸ばしてルカルの体に触れる。

「はあうっ……っ！」

「んくああっ……！」

二人はどちらからともなく、お互いの体を抱き締め合い、胸を押し付け合い、体をこすり付けあった。

足の間に割り込んだ太腿が股間を擦り上げ、それに反応した側が同じようにして太腿で相手の股間を擦り上げる。

胸を押し付け合い、揉み合っているうちに、再び顔が近づいた二人は、自然と唇を重ねていた。

お尻に伸ばした手で尻肉を揉めば、もう片方は体に回した手で乳房を揉む。

どちらがどこにどう触っているのか、感覚を共有していることもあって、二人は訳がわからないまま、気持ちいいという感覚だけに満たされて行った。

「ふぐっ——いくううっ！」

最初にそう言って絶頂したのはどちらだったのか。

「ひうっ、あああっ、イクウっ！」

もう片方の方もそれに追従するような形で絶頂したため、どちらが先かという話は全く意味がなかった。

密着したまま、絶頂する二人。暫く二人の間では絶頂の感覚が互いにやりとりされ、それはかなり長い間続いた。

絶頂の無間地獄かというくらいに、長く続いた絶頂から、二人は降りて来る。

「もっと……気持ちよくなりましょうか……っ」

ハクが笑みを浮かべてそう提案すると、ルカルもそれに異論などあるはずもなく、素直に準備を手伝う。

用意されていたのは、巨大な耐水性のマットだった。それは二人が横になって寝れるほど大きなものだ。

それに加え、ハクが取り出して来たのは、媚薬ローションである。

「これをお互いの体に塗りたい……そして、体を擦りつけ合ってください。素敵でしょう？」

そのハクの提案は、ルカルからしても素晴らしいことのように思えた。

先ほど、何も用いずに体を擦り合わせるだけでも、相当気持ちよくなっていた。

そこに専用のローションまで加わってしまったなら、どれくらい気持ちよくなるだろうか。

「さあ、スーツを脱がしてあげますね」

ハクがそういつてルカルのスーツを脱がし始める。

着せられてからほぼずっとバニースーツ姿でいたため、裸になるのが新鮮だった。

Eカップに成長した乳房がスーツから解放される。スーツは胸の成長に合わせて変形していたようだが、形を整えるためにある程度は抑え込んでいたらしく、スーツを脱ぐことで一回りは大きくなったように感じた。

直接ハクの手がルカルの乳房を揉む。

「ひゃう……っ」

「とてもいい感じに育ちましたね……ふふっ、可愛らしいですよ」

そう囁きかけるハク。ルカルはその誉め言葉に、思わず赤面してしまっていた。そこに違和感を覚えることは、もうない。

「ほら……脱がしてあげてるんですから……私の方も脱がしてくださいよ」

ハクにそう甘えるように囁きかけられ、ルカルは素直にそれに応じる。

二人は互いに互いのスーツを脱がし合い、その途中で戯れに互いの体を弄った。

甘い嬌声が響き、呼応する。

そうして二人はマットの上で生まれたままの姿で向かい合って座っていた。ハクはもちろん、ルカルも自然とお尻を地面に着ける座り方——いわゆる女の子座り——をしていた。

ハクがローションボトルからローションを取り出す。

ヌメヌメと怪しく光るハクの手から、ルカルもそのローションを受け取った。

「それじゃあ……始めますよ」

「ええ、わかったわ」

そうルカルが応じ、膝立ちになった二人は、お互いの体にローションを塗りたくり始める。

ぺちや、びちや、とローションがお互いの体に付着する。最初、ローションは冷たく感じた。思わず二人が体を固くする程度には実際冷たかったのだ。

だが、すぐにその冷たさは興奮の熱にかき消されていく。

ぬるぬるとした手が動き、舌のように濡れた掌が体を舐めまわす。

それは先ほど二人で互いの体を弄り合ったときよりも、はるかに強烈な快感となって二人を感じさせた。

「ひゃうううっ！ んああつ、こん、こんなのっ、しらない……ッ！」

「ひゃんっ、んっ、あううっ……！ 気持ち、いいです、ねえ……！」

呻き、喘ぎながら二人はお互いの体を弄り続ける。元から濡れていた股間は元より、スーツから解放された乳房もあつという間にローション塗れになって、テカテカと光り始める。

スーツを脱いだことで、ルカルはハクの体がどれほど清らかで美しく、そして何より魅力的かを実感していた。シミ一つない肌、歪みのない体のライン、包容力に溢れて魅力的な乳房、そしていやらしく口を開ける性器。

全てが完璧な身体であり、性的に愛されるために存在しているといっても過言ではない。

「んう……っ、綺麗、ねっ……」

心からの賛美する声が出るほどに、ルカルはハクの体に魅せられていた。

そんなルカルの言葉に、ハクは妖しく微笑む。

「ふ、ふふっ……何を、言ってるの？ あなたも、そうなのよ……」

そう言っつて、ハクは部屋に置かれていた姿見を指さす。身だしなみを整えるために必要なものであるため、部屋に常備されていたのだ。

ハクに言われるまま、その鏡を見たルカルは——そこに映る自分の姿に瞠目した。

美しい肌、整った体のライン、ハクには及ばずとも大きな胸、そして、透明な涎を流している無毛の割れ目。

ハクに匹敵するほど完璧な美しく魅力的な身体だと、ルカルも認めざるを得ない。

そしてそれが自分自身の身体なのだというのも、もはや疑いようのない事実だった。



「ほら、一緒にイキましょう？」

ハクがそう言っつて、腰を降ろし、片足を大きく開いて股間を露わにする。

どうすればいいのか、ルカルは聞かずとも本能的に理解した。

同じように腰を降ろし、ハクとは逆側のあ脚を上げ、交錯するよ  
うに自分の股間をハクの股間へと押し付けたのだ。

二人の性器と性器が、合わさるようになつてぶつかり合う。

いわゆる貝合わせという行為だった。

「ふああつ、あつっ！」

ぶつかり合った性器同士が強い快感を生み出す。

ルカルはハクのあげた足の膝を掴み、動揺にハクもルカルの上  
げた足の膝を掴む。

そして、その足を引き寄せせるようにして自分の身体へと寄せ――  
結果、二人の性器はさらに強い力でぶつかり、擦れ合った。

「んひいいいっつ！」

あまりに強烈な快感の奔流に、二人は同時に叫ぶ。

もはや性器が濡れているのはローションなのか、それとも愛液な

のか、どちらかもわからない。

ただ二人は気持ちいい感覚に従うまま、互いの体を引き寄せ合い、激しく股間をぶつけ合って何度も絶頂した。身体と体がぶつかり合い、激しく愛液が撒き散らされる。

二人の間で感覚共有は変わらず行われていたため、その快感は単純に二倍以上に膨れ上がり、そのまま二人して果てた。

ひと際大きな絶頂を経て、二人は力尽きて体を絡み合わせ、股間を合わせたまま、しばし呼吸を整える。

「ああ、そうだ……ひとつ、言うべきことがあったんでした」

必然的に生じた休憩中、ふと思いついたようにハクが呟く。

ルカルは呼吸を荒げつつ、突然始まったハクの告白に耳を澄ませる。

「私は——元ロタール連邦少佐、アルフ・エーベルバッハです。ルカル大佐」

元部下の名前を聞き、ルカルは目を見開いた。絶頂の余韻にあつたが、正気に戻っていた。

「は……？ アルフ、だと……？ あの、アルフ、か……！？」

アルフ・エーベルバッハは、かつて一時期彼が面倒を見ていた男だ。

非常に見どころのある男で、密かにルカルは目をかけていた。

慌てて頭を持ち上げてハクを、アルフを見る。

当然ながらそこにアルフの面影などどこにもない。だがそれは自分も同じことだったので気にはならなかった。

問題は、どうしてこのタイミングで正体を明らかにしたのかということだ。

「……いや！ そんなことはどうでもいい！ お前がアルフだというのなら、共にここから脱出を——」

かつて、ルカルが面倒を見ていた時のアルフは、人よりかなり意志が強く、我慢強いという印象だった。

そんな彼だから、もしかするとアウライ帝国の卑劣な改造手術にも耐え、正気を保っているのかもしれない、とルカルは考えたのだ。

だが、ルカル自身が証明してしまっているように、意思の強弱で調教の結果が変わるほど、アウライ帝国の技術力は甘いものではなかった。

脱出を持ちかけようとしたルカルの股間に、ハクは——アルフは自分の股間を打ち付ける。

「んひいっ!? あ、アルフ、なにを……っ」

「まだそこまで希望を持っているのは凄いなと思います……無理ですよ。それはルカル大佐もよくわかっているでしょう？」

そういうアルフの目には、どこか哀れみが籠っていた。

「もう手遅れなんですって」

「そ、そんなことはない……っ！ まだ、私は……！」

「ルカル大佐、今日私は一度たりとも命令装置マリオネッターを使用していないんですよ」

抗おうとしたルカルの反抗心は、アルフのその一言で粉々に砕け散った。

優秀なだけあって、ルカルはその言葉を聞いただけで大まかの現状を悟ってしまったのだ。

（確かに……今日は、一度も命令されて、いない……）

独房から出る時でさえ、「付いて来てください」としか言われていなかった。

命令でないのであれば、それを無視することも出来たはずなのだ。

その後、この部屋に辿り着く迄の間にも、いくらでも逃げる隙はあったはずなのに、ルカルは素直にアルフの後ろをついて歩くことしかしなかった。

言うことを聞くことが自然なことだと、彼は思ってしまったのだ。

愕然とするルカルに、アルフが優しく囁きかける。

「もういいじゃないですか。本国に帰ったところで、私たちを待っているのは白眼視と差別だけですよ。本当はあなたもわかっているんでしょう？」

甘く囁きかけられたルカルは、必死になって首を横に振る。

「違う……！ 違う！ 私の意思じゃない！ スーツにやらされた……そうだ、スーツに強制されただけだ！」

それは彼にとって、無理矢理やらされたことだという風に思い込むための、最後の砦だった。

だがそんなルカルの最後のラインを、アルフは破壊する。その時のアルフが浮かべていた表情は、どこか悲し気にさえ見えた。

「スーツなんて、とっくに脱いだじゃないですか」

その事実を突きつけられたルカルは、崖から突き落とされたような気分になり、呆然としてしまった。

呆然として虚空を眺めるルカルを置いて、アルフは一度立ち上がった。

そして柵から何かを取り出して戻ってくる。

「まだ試作の段階なんですけれど……いまよりもっと、何も考えずに気持ちよくなれる道具があるんです」  
そう言ってアルフがルカルに示したのは、チューブが男性器の形をした葉だった。

元々自分にもあったはずのそれを見るのが久しぶりだとルカルは感じ、さらに愕然とする。

それに加え、その形を見ていると無性にむしゃぶりつきたくなっているのを、彼は自覚していた。

(な、なんなの……この、感覚……っ)

口の中に涎が勝手に溜まるのをルカルは感じる。

その口の中の涎を飲み込むと、ごくりと喉が鳴った。

まるで美味しそうなものを見て我慢が利かなくなっている犬のような、浅ましい反応だった。

そんなルカルの反応を見て、アルフはくすりと微笑む。

「もうロタール連邦のことなんて……故国のことなんて忘れて、素直になりましょうよ。誰もそれであなたを責めたりしませんよ」

もちろんこの私です、と優しく、甘くアルフはルカルに呼びかける。

ルカルはその男性器の形をしたチューブを見ているだけで、頭がぼうつとして理性が薄れていくのを感じていた。

マットの上で半身を起こしているルカルの口元に、アルフがそのチューブを持って来る。

それはまるで、男性器を舐めさせられる時の角度のようだった。

「いいんですよ。ほら、素直になって」

再度の誘惑に、ルカルは抗いきることが出来なかった。

男性器の形をしたチューブを口で啜える。

「んう……っ、んんうううっ！」

啜えてしまえばあとは早かった。じゅるるる、とチューブの中の液体を一気に吸い出し、嚥下していく。

あっという間にチューブの中は空になり、全ての液体はルカルの喉に落ちていった。

「よく飲みました」

アルフがそういつてルカルの頭を優しく撫でる。

頭を撫でられるなど、本来のルカルの立場や性格からすればとても許容できる行為ではないのだが、いまのルカ

ルは褒められてとても嬉しい、という感情を抱いてしまう。

その気持ち良さに彼が浸っていると、飲み干した薬の効果が表れ始めた。

「んう……っ、んあ、ああ……っ!?」

股間が熱くなり、異様な熱を持ち始める。

思わず彼は両足を開き、少しでも温度を下げるために大股開きになった。

開けっぴろげに開かれた両足の間で、愛液とローション塗れでドロドロになった性器がヒクついている。

だが明確な変化はそこではなく、割れ目の上側、クリトリスに現れた。

彼のクリトリスは、アルフとの具合合わせによって充血し、最初から勃起した状態にあったが、そのクリトリスが

さらに膨らんでいく。

明らかにおかしい勢いでクリトリスが肥大化し、それはまるで男性器が再び生えて来たかのようなだった。

そのクリチンポともいうべき存在は、少し空気に触れるだけで、クリトリスとペニスを同時に扱き上げているような快感が生じていた。

「ふおおっ、あおっ、おおおっ!？」

思わずルカルが体を震わせると、それに従ってクリチンポが振り回される。

それだけの動きで、ルカルは頭が破裂しそうなほど強烈な快感を覚えてしまった。

感じ過ぎて頭がおかしくなってしまうようになるルカルは体を止めようとするが、意思の力ではとても止められない。

「あおっ! あひっ、んぎいっ、あぁっ! ひぎいっ!」

とても気持ちのいい感覚を覚えているとは思えない悲痛な声でルカルが叫ぶ。

それを見かねてか、アルフが手を伸ばして振り回されていたルカルのクリチンポを鷲掴みにした。

「——ぴぎいっ!？」

不規則な動きこそ止まったが、それはそれで強すぎる刺激だったらしく、ルカルが白目を剥いて体を硬直させる。

情けないアへ顔を晒したルカルのクリチンポから、大量の白い液体が——精液が噴き出す。

その時ルカルが感じた快感は、それまでの調教で彼が感じたどんな快感より遥かに強烈な快感だった。

頭の血管が引き千切れてしまわなかったのが奇跡、というくらいの凄まじく素晴らしい快感ではあった。

だが同時に、ルカルは謎の喪失感を味わっていた。

自分が大事にしていた物が無惨に噴き出して台無しになってしまったような、そんな喪失感だった。

(いったい、なに、が……?)

失ったものは何か、ルカルは考えたが答えは出なかった。

そんな彼の射精する様子を、笑いながら見ていたアルフは残酷な事実を告げる。

「いまあなたが噴き出したものは、国への忠誠心や使命感、信念といった——人が人として存在する上で必要な尊厳ですよ」

固まってしまったルカル。そんな彼に対し、アルフは続けた。

「すごいですよね。アウライ帝国の技術力って。そんなものを選んで分離することが可能なんですから」

そういったものを失った人間がどうなるかわかりますか、とアルフは言う。

「本能的なことしか出来なくなるんですよ。普通の人間なら、食べる、寝る、そしてセックスですが……私たちがのように精液でしか栄養を摂れなくなった者は、気持ちよくなることしか考えられなくなるんです。気持ちよくなるだけ気持ちよくなって、力尽きたら眠り、目が覚めたらまたその繰り返しです」

つまり、とアルフはルカルに告げた。

「あなたも遅かれ早かれ——気持ちいいことしか考えられない変態になるんですよ」

「ひっ……はっ……ひう……はっ……!」

残酷な事実を告げられたルカルだったが、その目はすでに虚ろだった。

度重なる絶頂や、クリチンポによる射精によって、彼の受け入れられる快樂の許容範囲を遥かに超えていた。思考することもままならず、ただアルフに掴まれたクリチンポから溢れ出しそうになっている感覚に震えている。

そこから出したいという欲求はあらゆる事象を飛び越えて、彼の思考を塗りつぶすほどのものになっていた。アルフはルカルのクリチンポから手を放し、ベッドへと腰掛ける。

「仮にずっと出さないでいられれば、いままで通りのルカル大佐のままでもいいかもしれませんが——キャッ!?」

アルフの口から悲鳴が零れた。

煽ろうとしていたアルフを、ルカルがマットに押し倒したのだ。

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ……!」

激しい荒い呼吸を繰り返しながら、ルカルがアルフを組み伏せる。

アルフは驚きつつ、嘲笑いながらも、どこか虚しそうな顔をしていた。

「全然堪えられてないじゃないですか……まあ、人間なんてどんなに高尚なフリをしてもその程度で——んくうっ!」

アルフが吐き捨てるより、ルカルの挿入の方が早かった。

すっかり本能に支配されたルカルは、そのままクリチンポをアルフの奥まで挿入すると、そのまま早くも一度目の射精——正確には噴き出しているのは精液ではないが——に至る。

噴き出す感覚と共に、男性の時に覚えていた虚無感を何千倍にもした感覚が彼を襲う。

取り返しをつかない何かを失いつつあるとルカル本人も理解していたが、とてもそれを我慢できるような状態になかった。

そんなルカルが虚脱感に苛まれている間に、アルフは足を使ってルカルの腕を引っ掛け、器用に投げ技をかけるように体を捌いて上下を入れ替わる。

「勝手に挿入して出したお返しです。あなたのくだらない虚栄心も何もかも、搾り取って差し上げますっ」  
 そう告げると、アルフは激しく腰を上下し始めた。

ルカルのクリチンポを膣で締め上げ、しっかりと上から下まで擦り上げるようにして刺激を加える。

「ハッ！ ウアッ、アアアッ！」

獣のような声をあげることしか出来なくなったルカルは、アルフに押し掛かれたまま、何度も射精に至る。最初はそうやって一方的にルカルを逆レイプしていたアルフだが、徐々にそのお腹が重たくなっていくのを感じた。

「くう……っ！ こ、こんな、ここまで凄まじい愛国心と忠誠心を持って、いたのですか……っ！？」

ルカルのクリチンポから噴き出し続けるそれは、アルフのお腹を膨らませるほどになっていた。ずっしりと重量すら感じるそれが、どれほどの分量に当たるとか、アルフは新薬の実験を任されていたのでよく知っている。

一般的な兵士の捕虜のその薬を使ったところ、普通の男性の数十分の量にしかならなかった。それでも十分多くはあったが、アルフの腹部を膨らませるほどになることはまずありえない。

つまりそれだけ、ルカルの国への忠誠心や愛国心といったものは凄まじく大きなものだったということだ。

その事実にも、アルフは不覚ながらルカルのことを見直した。

「もしあなたが私と同じやり方で調教されていたら……どれくらい堕ちるまで時間がかかっていたんでしょね。

いえ、もう言っても栓のないことですか……」

試してみたかった気もしたが、もはや引き返すことは出来ない。

ルカルの忠誠心はすでにその大半が無為に消費されたのだから。

アルフはせめて一緒に気持ちよくなることで、ルカルのその心の供養とすることにした。

それはある意味、アウライ帝国に身も心も堕ちたはずのアルフが、ロタール人に抱いた最後の慈悲だったのかも  
しれない。

その後、二人はルカルにその全てを絞り出させるまで——気絶するまでセックスし続けたのだった。

## 第七話 調教完了

調教師が久しぶりにその独房を訪れた時、その女は一心不乱に自分の性器を抉っていた。部屋中に発情した雌の匂いがこびり付き、異様なまでに臭いが濃くなっている。

「ひぐううっ！ ひぐうううっ！」

その女——銀髪紫眼で、バニーガールに似たスーツを身に着けたその女は、調教師が部屋に入って来たことにも気づかない様子で、ひたすら自慰に耽っていた。

命令がある時以外、とにかく性器を弄りたがるので普段は接触を禁止するなどの対策を取っているらしい。

今日は調教師が久しぶりに訪れるということで、あえて自由にさせていたのだ。

(なるほど……中々憎い演出をするじゃねえか)

調教師は彼女の調教を担当したハクの手腕に感心していた。

すっかりアウライ帝国の——調教師の忠実な手下となった彼女は、時に彼も感心するような手法で元仲間を追い詰めていた。

それゆえにその女の調教も任せただけだが、あまりにも短時間で、調教を完成させていた。

新薬の力が大きいとはいえ、それにしても見事な手腕だ。

(またご褒美でもくれてやるか……それにしても、良く育ったなあ)

調教師がそう思いながら見ていたのは、ルカルの巨大に膨らんだおっぱいである。

すでにGカップ近い大きさになっているそれは、ルカルの小さな顔に匹敵する。頭が三つあるようなものだ。それだけの大きさになっているということは、完全にナノマシンが定着しているということだ。

もはやルカルの頭の中には、アウライ帝国への忠誠心と気持ちいいことに対する執着心しか残っていないだろう。「ひぎいいいっ！ んぎいいいっ！」

しみじみと調教師がルカルを眺めている間に、彼女は激しく体を波打たせ、調教師のところまで飛びそうな勢いで股間から潮を噴く。

もはや愛液を垂らすとかそういうレベルではなくなっていた。

「はあ……はあ……はあ……あっ」

絶頂後の余韻に震えていたルカルは、何気なくふと横を見て、調教師が来ていることによく気付いた。

慌てて起き上がったかと思うと、土下座する勢いで調教師の足元へと這いずり寄ってくる。

「調教師さまあ。もっと、気持ちいいことしてくださいさあ。ルカル、なんでもするからあ」

躊躇なく調教師を『様』付けで呼び、本来の本人が決して出さないのであろう甘ったるい声で擦り寄ってくるルカル。

ほんの少し前までの、軍人らしい気迫に満ちた態度はどこにも感じられなかった。

そのあまりの変貌っぷりに、若干調教師の方が引きかけた。

「お、おお……ごほん。いいだろう。俺についてこい」

気を取り直して咳ばらいをした調教師は、元気に返事をしてぴったり後ろを付いてくるルカルを連れ、自分の部

屋へと移動する。

そしてベッドの上に腰掛けた。ルカルは何も言われずとも、調教師の前に正座で座り、荒い呼吸をして涎を垂らしながら指示を待つ。

どこからどうみても、ただの発情したあさましい女だった。

その視線はまっすぐ調教師に、調教師の股間へと向いている。

あまりに本能に忠実すぎるルカルの様子に、調教師は苦笑しながら、命令を下す。

「俺をパイズリとフェラチオで満足させてみる。それが出来たら、お前の穴に入れて——っ！」

調教師が言うが早いか、ルカルはすでに動き出していた。

調教師のズボンのチャックをずらすと、跳び出して来た生臭い男性器を躊躇いなく口で啜える。

じゅるじゅる、ずるぺちや、と激しく下品な音を立てて、口で男性器を刺激し始めた。

恐ろしく躊躇いのない行動の速さだ。そして、舌遣いはとても元男と思えないくらいに、上手い。

「ぐっ……！！ やるじゃ、ねえか……！！」

しっかり仕込みは終わっているのだと言わんばかりの勢いに、調教師は思わず唸る。

確かに調教が完了したという報告は受けていたし、例の新薬を用いてその膨大な忠誠心や愛国心を一掃したという報告もあったが、ここまで一足飛びに調教が進んでいるとは思っていなかった。

（全く……！！ 我ながら恐ろしいものを作ってしまったものだ……！！）

調教師がそう思いながら、いよいよ出せそうに感じた時、急にルカルは口をペニスから離してしまった。

肩透かしを食らった気分になりかけた調教師だったが、ルカルが立て続けにパイズリを始めたことで、再びその興奮が戻ってくる。

フェラチオでしつかり培われた基礎は、パイズリへのスムーズな移行によって、瞬く間に同様の興奮度合いまで持ち上げられた。

ルカルのぽんぽんに膨らんだ乳房に挟まれる感触は、調教師の想像以上に素晴らしい快感を生み出している。

「んあ……っ」

フェラチオの段階で十分に濡れていたペニスに対し、パイズリするルカルが舌を出して唾液をそこからペニスに向けて垂らす。

糸を引きながらゆっくりと落ちていくそれは、ペニスに触れることには絶妙に冷えており、ただ滑りを増すだけではない絶妙な感覚の変化を連続で味合わせてくれた。

「ぐお……っ！　ハク、め……！　しこみすぎ、だろ！」

ほんの少し前まで男だったとはとても思えない手管は、間違いなくハクの仕込みだ。

ハクには自分を満足させるために様々な技術やテクニックを仕込んでいたが、彼女はそれを惜しみなくルカルに与えているらしい。

「んう……ッ、んぷっ」

さらにルカルは、パイズリをしながら、調教師の亀頭を口に含む。



規格外に大きな乳房を持つからこそできる、パイズリとフェラチオの合わせ技だった。

そう来ることは調教師も予想出来ていたものの、それまでの積み重ねが見事だった。

十分に涎を溜めた口内で、舌尖を使って調教師の亀頭が擦り上げられる。

「くお……ッ！　だ、出すぞ……ッ！」

「ふあいつ、ふおうふおッ」

調教師のペニスの先から生臭く濃い精液が噴き出す。

それをルカルは口を窄めて変な顔になるのも厭わず、強くバキュームして一滴すら残さないように吸い込んでいく。

絞り出される感触に、調教師はかなりの満足感を得ることが出来た。

ビクビクッ、と調教師のペニスが痙攣し、最後の一滴を絞り出す。そのペニスの中に残った僅かな残滓すら、ルカルのバキュームは吸い取った。

「ふう……ははっ。さすがにこいつは予想外だったな……」

片手で頭を掻く調教師。

ここまでの出来栄えになっているとは、正直全く思っていなかった。

「んう……ふおうふえいふえふ……」

ルカルはとろんとした表情で注がれた精液を味わっていた。

精液からしか栄養を得られなくなっているとはいえ、ただ精液を口に含んだだけでそこまで恍惚とした顔をする

者は他にいない。

そのあまりの変貌ぶりに若干引きつつ、調教師はルカルの尻を叩いて立ち上がらせる。

「おら、仕方ねえからご褒美をくれてやる。壁に手を突いてこっちにケツを向けろ」

「ンクッ……はいつ！」

勢いよく精液を飲み込んだルカルは、うきうきと嬉しそうな表情を浮かべながら、躊躇なく壁に手を突いた。

そして、調教師が入れ易いようにと、お尻を突き出して挿入を待つ。

調教師はそんなルカルの腰を掴み、挿入の態勢を取ってから、ふと思いついたように尋ねた。

「おっと、大事なことを忘れるところだった。おい、ルカル。お前が記憶している限りの、機密情報を話せ。話している間だけ、腰を動かしてや——」

「アンドリュー・スチュワート議員は国防費の横領をしています！ しかし二世議員であることから、お目こぼしを受けています！」

躊躇なく、ルカルは機密を暴露した。

思わず調教師の動きが止まる。

「それから、新兵器開発の件ですが——」

「おい、ちょっと待て、待て。躊躇いねえなオイ。俺が言うのもなんだが……祖国に対するなんかこう、あれはねえのか？」

あまりの勢いに調教師の方が戸惑ってしまっていた。

彼にそれを強く思わせたのは、かつてルカルの部下だったアルフを墮とした時のことがあったからだ。

アルフが機密情報を漏らす直前、調教師は彼の身も心も完全に墮ちた状態にある、と判断していた。

だが実際にそのことを聞き出そうとすると、本人すら無意識で話すことを拒否したのだ。

心、というものがいかに強靱な物か、調教師が実感した出来事である。

無論、その後すぐ陥落させ、機密を聞き出したが。

「お前の部下だったハクは、墮ち切ったと思って心底墮とすのにはちと面倒がかかったっていうのに」

「ロタール連邦への郷愁、ですか？」

ルカルの頭の上には、はてな、が浮かんでいた。

あれだけ忠誠心に満ち溢れた男でさえ、もはやそのことを忘れたように——実際全部体の外に出してしまったのだから忘れているのである——ただ気持ちよくなることを目的に振る舞っている。

そのことを改めて実感し、調教師は邪悪な笑みを浮かべる。

「くっくっくっ……お前のおかげで俺の地位はさらに盤石になるな。ありがたい」

「お役に立てたのでしたら、光栄です！」

満面の笑みで母国を売れることを喜ぶルカル。

その様子を見た調教師は、さらに邪悪に笑うのだった。

ペニスの先端をルカルの股間に突き付け、そして、一息に挿入する。

「んほおっ！ きたあっ」

いきなりの挿入だったにも関わらず、ルカルの膣はあっさりと調教師のペニスを奥まで受け入れてしまっている。膣内が別の生き物のようにうねり、締めり、調教師のペニスをしきりに刺激している。

「ふはっ！ いいぞ、ここだけ別の生き物みてえに吸い付いてきやがる！ おらっ、ぼけっとしてねえで、機密を話しながら、腰も動かさせ！」

調教師の平手が、ルカルのお尻をばちんと叩いた。

その衝撃でさらに強く調教師のペニスを締め付けてしまいうルカル。

その顔を快楽に蕩けさせながら、彼女はロタール連邦の機密を次々話し出した。新兵器の話に始まり、各軍の弱点、攻められたくないところ、重要な中継拠点——そのうちのひとつでも敵方に漏れただけで、大損害となる機密を、一つ一つ丁寧に話していく。

話している間にも、ルカルの腰は前後に動き、その膣の中は調教師のペニスを締め付けて射精させようと蠢いていた。

愛液が足の方に伝わって足元まで濡らすほど垂れ、その大きな乳房を千切れんばかりに振り回して快楽に打ち震える。

いまのルカルの膣内の気持ち良さには、百戦錬磨の調教師でさえ、長くは耐えられなかった。

それでも、十分な機密を聞き出せる程度には耐え、一層大きな快楽の訪れを感じる。

「うっ……くっ……出す、ぞ……ッ！」

ルカルの膣の奥、下がって来た子宮を押し上げ、その快楽にルカルが背中を仰け反らせて悲鳴を上げる。

「ああ……ッ、奥に、奥にください……ッ、浅ましく卑しい私の体の奥に——調教師様のお恵みを！」

そのどこからどう聞いても完全屈服した奴隷の台詞に、調教師はニヤリと笑みを浮かべる。

「上出来だ……！ おら、受け取りな！」

調教師のペニスが激しく波打ち、ルカルの体の奥で精液を弾けさせる。

ルカルはその感覚をダイレクトに受け取った。

「ふあっああああ……ッ！」

快楽に蕩けた、女そのものの声をあげるルカル。

その時——ルカルの瞳から一筋の涙が流れた。

果たしてそれは、強すぎる快楽を受け続けたことによる、生理的な現象によるものだったのか。

あるいは、ほんのわずかに残っていた、本来のルカルの最後の残滓だったのか。

そんなことはどうでもよく、子宮目掛けて中出しをされたルカルは、激しくその体を震わせ、絶頂したのであった。

調教師は大佐へと昇格した。

ルカルから得た機密情報を駆使し、ロタール連邦内での分断工作や政争誘発などを行い、連邦に対して徹底的に打撃を与えることに成功した結果だ。

ロタール連邦はすっかり混乱し、アウライ帝国との戦いでも精彩を欠き、多くの砦や街が侵略されていた。

十二分な戦果を上げた彼は、帝国内での発言権も増し、まさにいまがこの世の春と言わんばかりの栄華を極めていた。

「忠実な駒もどんどん増えているしな……くっくっくっ、笑いが止まらんね」

裸でソファにふんぞり返っている彼の左右には、裸の美女が二人寄り添っていた。

ハクと、ルカルの二人だ。二人は生まれたままの姿で、そそり立った調教師のペニスに一心不乱に奉仕をしている。

左右から同時に舐めさせているため、時折二人の舌同士が絡み合い、淫靡な光景を生み出していた。

「よし……そろそろいいか。今日はどっちが先に入れて欲しいんだ？」

「調教師様！ 私は今日、ロタール人の捕虜を三人屈服させました！」

「あっ、ハク様、それは素晴らしいです！ うち一人は私がやりました！」

「それでも私は二人だから、私の勝ちでしょう？」

「うう……そんなあ……」

調教師はこれでも相当な精力の持ち主なので、二人程度なら多少順番が前後するだけで問題なく相手することが出来る。

それがわかっていてもなお、二人は自分こそが先に犯されたいと思っているのだ。

そんな愚かしくも愛しい奴隷二人を、調教師は嘲笑いながら犯すのが日課となっていた。

今日もそうして擦り寄ってくる二人を気絶するまで責め倒した。

奴隷二人への責めを終えた後、調教師の男は着替えつつ、一枚の書類を手にとっていた。

（さて、と……これでロタール連邦の国力は削ぐだけ削げたか……ここから先は泥沼の戦争になりかねないし、

一端連邦は放置だな……）

連邦は度重なる混乱のせいですっかり国力そのものが摩耗している。

ここからさらに攻め込んでしまうと、やりすぎて全滅させてしまうか、あるいはゲリラ戦が展開されるようになって面倒なことが増えることが考えられた。

手軽に人員として使える捕虜が捕まえられなくなるのは少々痛いけど、ここまでの戦争で十分な数はすでに確保できたともいえる。

（連邦にはこれからも使える人間を育ててもらわんといけなからな……となると）

ここから調教師がさらに成り上がっていくには、国内の邪魔なものを排除していく必要があるだろう。

(なまじ味方だから、道筋は選ぶ必要があるが……なあに、こいつさえあれば、やり方はいくらでもあるさ……)  
そういう彼の手には、新型の女体化ナノマシンの詰まったカプセルが握られていた。  
高らかに笑う彼の足元では、ルカルとハクの二人が力なく倒れている。

二人のはしたなく開かれた足の間からは、調教師によって注がれた精液が溢れ出していた。















